

(案)

## 農薬評価書

# エトフェンプロックス

2009年7月21日

食品安全委員会農薬専門調査会

## 目次

	頁
○ 審議の経緯	3
○ 食品安全委員会委員名簿	3
○ 食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿	4
○ 要約	6
I. 評価対象農薬の概要	7
1. 用途	7
2. 有効成分の一般名	7
3. 化学名	7
4. 分子式	7
5. 分子量	7
6. 構造式	7
7. 開発の経緯	7
II. 安全性に係る試験の概要	8
1. 動物体内運命試験	8
(1) ラット	8
(2) イヌ	12
(3) ラット及びマウス	13
2. 植物体内運命試験	14
(1) 水稻	14
(2) さやいんげん	14
(3) ぶどう	15
(4) なたね	16
3. 土壌中運命試験	16
(1) 湛水土壌中運命試験	16
(2) 好氣的土壌中運命試験	17
(3) ガラス表面光分解試験	17
(4) 土壌吸脱着試験	18
(5) 土壌溶脱性（リーチング）試験	18
4. 水中運命試験	18
(1) 加水分解試験	18
(2) 水中光分解試験	18
(3) 田面水中における減衰試験	19
5. 土壌残留試験	19
6. 作物等残留試験	20
(1) 作物残留試験	20
(2) 魚介類における最大推定残留値	20

7. 乳汁移行試験	20
8. 一般薬理試験	20
9. 急性毒性試験	23
(1) 急性毒性試験	23
(2) 急性神経毒性試験	24
10. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験	24
11. 亜急性毒性試験	24
(1) 90日間亜急性毒性試験(ラット)①	24
(2) 90日間亜急性毒性試験(ラット)②	25
(3) 90日間亜急性毒性試験(マウス)	26
(4) 90日間亜急性神経毒性試験(ラット)	26
(5) 90日間亜急性吸入毒性試験(ラット)	26
(6) 28日間亜急性経皮毒性試験(ウサギ)	27
(7) 90日間亜急性毒性試験(ラット:代謝物IV)	27
12. 慢性毒性試験及び発がん性試験	27
(1) 1年間慢性毒性試験(イヌ)	27
(2) 2年間慢性毒性/発がん性併合試験(ラット)	28
(3) 2年間発がん性試験(マウス)	29
13. 生殖発生毒性試験	29
(1) 2世代繁殖試験(ラット)	29
(2) 発生毒性試験(ラット)	31
(3) 発生毒性試験(ウサギ)	31
14. 遺伝毒性試験	32
15. その他の試験: 甲状腺腫瘍発生メカニズム試験(ラット)	33
Ⅲ. 食品健康影響評価	35
・別紙1: 代謝物/分解物等略称	39
・別紙2: 検査値等略称	40
・別紙3: 作物残留試験成績	42
・参照	55

1 <審議の経緯>

2 ー清涼飲料水関連ー

- 1987年 4月 13日 初回農薬登録
- 2003年 7月 1日 厚生労働大臣より清涼飲料水の規格基準改正に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安第0701015号）
- 2003年 7月 3日 関係書類の接受（参照1）
- 2003年 7月 18日 第3回食品安全委員会（要請事項説明）（参照2）
- 2003年 10月 8日 追加資料受理（参照3）  
（エトフェンプロックスを含む要請対象93農薬を特定）
- 2003年 10月 27日 第1回農薬専門調査会（参照4）
- 2004年 1月 28日 第6回農薬専門調査会（参照5）
- 2005年 1月 12日 第22回農薬専門調査会（参照6）

3

4 ー魚介類及び畜産物の残留基準設定関連ー

- 2005年 11月 29日 残留農薬基準告示（参照7）
- 2009年 2月 4日 農林水産省より厚生労働省へ基準設定依頼（魚介類及び畜産物）
- 2009年 2月 17日 厚生労働大臣より残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安第0217001号）、関係書類の接受（参照8～11）
- 2009年 2月 19日 第274回食品安全委員会（要請事項説明）（参照12）
- 2009年 3月 2日 第21回農薬専門調査会確認評価第二部会（参照13）
- 2009年 7月 21日 第53回農薬専門調査会幹事会（参照14）

5

6 <食品安全委員会委員名簿>

(2006年6月30日まで)	(2006年12月20日まで)	(2009年6月30日まで)
寺田雅昭（委員長）	寺田雅昭（委員長）	見上 彪（委員長）
寺尾允男（委員長代理）	見上 彪（委員長代理）	小泉直子（委員長代理*）
小泉直子	小泉直子	長尾 拓
坂本元子	長尾 拓	野村一正
中村靖彦	野村一正	畑江敬子
本間清一	畑江敬子	廣瀬雅雄**
見上 彪	本間清一	本間清一

\*：2007年2月1日から

\*\*：2007年4月1日から

(2009年7月1日から)

小泉直子(委員長)  
見上 彪(委員長代理\*)  
長尾 拓  
野村一正  
畑江敬子  
廣瀬雅雄  
村田容常

\*: 2009年7月9日から

1

2 <食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿>

(2006年3月31日まで)

鈴木勝士(座長)	小澤正吾	出川雅邦
廣瀬雅雄(座長代理)	高木篤也	長尾哲二
石井康雄	武田明治	林 真
江馬 眞	津田修治*	平塚 明
太田敏博	津田洋幸	吉田 緑

\*: 2005年10月1日から

3

(2007年3月31日まで)

鈴木勝士(座長)	三枝順三	根岸友恵
廣瀬雅雄(座長代理)	佐々木有	林 真
赤池昭紀	高木篤也	平塚 明
石井康雄	玉井郁巳	藤本成明
泉 啓介	田村廣人	細川正清
上路雅子	津田修治	松本清司
臼井健二	津田洋幸	柳井徳磨
江馬 眞	出川雅邦	山崎浩史
大澤貫寿	長尾哲二	山手丈至
太田敏博	中澤憲一	與語靖洋
大谷 浩	納屋聖人	吉田 緑
小澤正吾	成瀬一郎	若栗 忍
小林裕子	布柴達男	

(2008年3月31日まで)

鈴木勝士(座長)	佐々木有	根岸友恵
林 真(座長代理*)	代田眞理子****	平塚 明

赤池昭紀  
石井康雄  
泉 啓介  
上路雅子  
臼井健二  
江馬 眞  
大澤貫寿  
太田敏博  
大谷 浩  
小澤正吾  
小林裕子  
三枝順三

高木篤也  
玉井郁巳  
田村廣人  
津田修治  
津田洋幸  
出川雅邦  
長尾哲二  
中澤憲一  
納屋聖人  
成瀬一郎\*\*\*  
西川秋佳\*\*  
布柴達男

藤本成明  
細川正清  
松本清司  
柳井徳磨  
山崎浩史  
山手丈至  
與語靖洋  
吉田 緑  
若栗 忍

\* : 2007年4月11日から

\*\* : 2007年4月25日から

\*\*\* : 2007年6月30日まで

\*\*\*\* : 2007年7月1日から

(2008年4月1日から)

鈴木勝士(座長)  
林 眞(座長代理)  
相磯成敏  
赤池昭紀  
石井康雄  
泉 啓介  
今井田克己  
上路雅子  
臼井健二  
太田敏博  
大谷 浩  
小澤正吾  
川合是彰  
小林裕子  
三枝順三\*\*\*

佐々木有  
代田眞理子  
高木篤也  
玉井郁巳  
田村廣人  
津田修治  
津田洋幸  
長尾哲二  
中澤憲一\*  
永田 清  
納屋聖人  
西川秋佳  
布柴達男  
根岸友恵  
根本信雄

平塚 明  
藤本成明  
細川正清  
堀本政夫  
松本清司  
本間正充  
柳井徳磨  
山崎浩史  
山手丈至  
與語靖洋  
義澤克彦\*\*  
吉田 緑  
若栗 忍

\* : 2009年1月19日まで

\*\* : 2009年4月10日から

\*\*\* : 2009年4月28日から

## 要 約

1  
2  
3 ピレスロイド系殺虫剤である「エトフェンプロックス」(CAS No.80844-07-1)につい  
4 て、農薬抄録及びJMPR資料を用いて食品健康影響評価を実施した。  
5 評価に供した試験成績は、動物体内運命(ラット、イヌ及びマウス)、植物体内運命  
6 (水稻、さやいんげん、ぶどう及びなたね)、土壌中運命、水中運命、土壌残留、作物  
7 残留、急性毒性(ラット、マウス及びイヌ)、亜急性毒性(ラット及びマウス)、慢性  
8 毒性(イヌ)、慢性毒性/発がん性併合(ラット)、発がん性(マウス)、2世代繁殖(ラ  
9 ット)、発生毒性(ラット及びウサギ)、遺伝毒性試験等である。  
10 試験結果から、エトフェンプロックス投与による影響は主に肝臓、腎臓、甲状腺及び  
11 血液に認められた。神経毒性、繁殖能に対する影響、催奇形性及び遺伝毒性は認められ  
12 なかった。  
13 発がん性試験において、ラットの雌で甲状腺ろ胞細胞腺腫が認められたが、遺伝毒性  
14 試験がすべて陰性であったこと及びメカニズム試験の結果より、腫瘍の発生機序は遺伝  
15 毒性メカニズムとは考え難く、評価にあたり閾値を設定することは可能であると考えら  
16 れた。  
17 各試験で得られた無毒性量の最小値は、マウスを用いた2年間発がん性試験の3.1  
18 mg/kg体重/日であったので、これを根拠として安全係数100で除した0.031 mg/kg体  
19 重/日を一日摂取許容量(ADI)と設定した。

1 **I. 評価対象農薬の概要**

2 **1. 用途**

3 殺虫剤

5 **2. 有効成分の一般名**

6 和名：エトフェンプロックス

7 英名：etofenprox (ISO名)

9 **3. 化学名**

10 **IUPAC**

11 和名：2-(4-エトキシフェニル)-2-メチルプロピル=3-フェノキシベンジル=エーテル

12 英名：2-(4-ethoxyphenyl)-2-methylpropyl 3-phenoxybenzyl ether

14 **CAS (No. 80844-07-1)**

15 和名：1-[[2-(4-エトキシフェニル)-2-メチルプロポキシ]メチル]-3-フェノキシベンゼン

16 英名：1-[[2-(4-ethoxyphenyl)-2-methylpropoxy]methyl]-3-phenoxybenzene

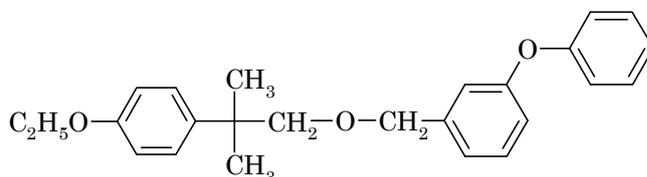
18 **4. 分子式**

19  $C_{25}H_{28}O_3$

21 **5. 分子量**

22 376.49

23 **6. 構造式**



28 **7. 開発の経緯**

29 エトフェンプロックスは、三井化学株式会社により開発されたピレスロイド系殺虫  
30 剤であり、鱗翅目、半翅目、双翅目等に対して、広い殺虫スペクトルを有する。神経  
31 軸索におけるナトリウムチャンネルの正常な働きを阻害することによって、殺虫活性  
32 を示す。

33 我が国では、1987年に初めて農薬登録が取得された。海外では米国、フランス、韓  
34 国等で登録が取得されている。ポジティブリスト制度導入に伴う暫定基準値が設定さ  
35 れており、今回、魚介類及び畜産物への残留基準の設定が申請されている。

## 1 II. 安全性に係る試験の概要

2 農薬抄録(2009年)及びJMPR資料(1993年)を基に、毒性に関する主な科学的  
3 知見を整理した。(参照8~9)

4  
5 各種運命試験[II.1~4]は、プロピル基の1位の炭素を $^{14}\text{C}$ で標識したもの  
6 ([pro-1- $^{14}\text{C}$ ]エトフェンプロックス)、プロピル基の2位の炭素を $^{14}\text{C}$ で標識したも  
7 の([pro-2- $^{14}\text{C}$ ]エトフェンプロックス)及びベンジル基の $\alpha$ 位の炭素を $^{14}\text{C}$ で標識した  
8 もの([ben- $^{14}\text{C}$ ]エトフェンプロックス)を用いて実施された。また、[pro-1- $^{14}\text{C}$ ]エト  
9 フェンプロックス及び[ben- $^{14}\text{C}$ ]エトフェンプロックスを等量混和したものを、 $^{14}\text{C}$ -エ  
10 トフェンプロックスと表記した。放射能濃度及び代謝物濃度は特に断りがない場合は  
11 エトフェンプロックスに換算した。代謝物/分解物等略称及び検査値等略称は別紙1及  
12 び2に示されている。

### 14 1. 動物体内運命試験

#### 15 (1) ラット

##### 16 ①吸収

##### 17 a. 血漿中濃度推移

18 SDラット(一群雌雄各5匹)に $^{14}\text{C}$ -エトフェンプロックスを30 mg/kg体重  
19 (以下[1.(1)]において「低用量」という。)または180 mg/kg体重(以下[1.(1)]  
20 において「高用量」という。)で単回経口投与し、血漿中濃度推移について検討  
21 された。

22 血漿中放射能濃度推移は表1に示されている。高用量群では、低用量群と比べ  
23  $C_{\text{max}}$ やAUCの上昇程度が投与量の変化より少なく、吸収に非線形性があると考  
24 えられた。(参照8、9)

25  
26 表1 血漿中放射能濃度推移

投与量	30 mg/kg 体重		180 mg/kg 体重	
性別	雄	雌	雄	雌
$T_{\text{max}}$ (時間)	5	3	5	5
$C_{\text{max}}$ ( $\mu\text{g/g}$ )	5.2	5.0	17.3	16.4
$T_{1/2}$ (時間)	22.0	36.2	29.1	31.7
AUC ( $\mu\text{g}\cdot\text{時間/g}$ )	93.4	84.3	314	320

##### 27 b. 吸収率

28 胆汁中排泄試験[1.(1)④b.]より得られた尿及び胆汁中排泄率と体内残留量  
29 (肝臓及びカーカス<sup>1</sup>の合計)の総計より、エトフェンプロックスの体内吸収率は、  
30

<sup>1</sup> 組織、臓器を取り除いた残渣のことをカーカスという(以下同じ)

1 低用量群で20.6~38.8%、高用量群で13.1~14.5%と算出された。吸収率におい  
2 ても、吸収に非線形性が認められ、低用量でより高い吸収率が得られるものと考  
3 えられた。(参照8)

## 4 5 ②分布

### 6 a. 単回経口投与

7 SDラット(一群雌雄各3匹)に<sup>14</sup>C-エトフェンプロックスを低用量で単回経  
8 口投与して、体内分布試験が実施された。

9 多くの組織では最終投与4時間後に放射能濃度が最高値に達し、副腎(36.7  
10 µg/g)、肝臓(16.1~21.7 µg/g)、甲状腺(17.3~21.4 µg/g)、脂肪(10.4~19.3 µg/g)、  
11 卵巣(11.8 µg/g)、膵臓(6.4~9.0 µg/g)及び腎臓(4.6~6.4 µg/g)で高い値で  
12 あった。その後、組織中濃度は経時的に減衰し、最終投与240時間後に多くの組  
13 織で放射能濃度が1 µg/g以下となった。しかし、脂肪では他の組織より減衰が遅  
14 く、最終投与240時間後に4.9~5.9 µg/gが残留した。(参照8)

### 15 16 b. 反復経口投与

17 SDラット(一群雌雄各5匹)に<sup>14</sup>C-エトフェンプロックスを低用量で7日間  
18 反復経口投与して、体内分布試験が実施された。

19 多くの組織では最終投与4時間後に放射能濃度が最高値に達し、脂肪(94.2~  
20 101 µg/g)、副腎(41.4~43.4 µg/g)、膵臓(25.1~30.8 µg/g)、卵巣(23.9 µg/g)、  
21 肝臓(22.3~30.5 µg/g)、甲状腺(12.7~18.7 µg/g)及び腎臓(8.71~8.84 µg/g)  
22 で高い値であった。その後、組織中濃度は経時的に減衰し、最終投与240時間後  
23 に多くの組織で放射能濃度が5 µg/g以下であったが、脂肪及び膵臓では他の組織  
24 より減衰が遅く、最終投与240時間後にそれぞれ25.0~45.2及び8.0~12.2 µg/g  
25 が残留した。膵臓の放射能濃度が高かったのは、脂肪組織が膵臓表面に付着した  
26 ためと考えられた。

27 また、妊娠ラット(10匹)に<sup>14</sup>C-エトフェンプロックスを低用量で7日間連続  
28 経口投与して、体内分布試験が実施された。

29 妊娠ラットでも、観察したすべての臓器において、最終投与4時間後に放射能  
30 濃度は最高値を示し、その後減衰した。最終投与4時間後に特に放射能濃度が高  
31 かったのは、乳腺(87.4 µg/g)、副腎(61.5 µg/g)及び肝臓(27.2 µg/g)であっ  
32 た。最終投与240時間後には、乳腺(32.4 µg/g)、副腎(5.74 µg/g)、肝臓(1.55  
33 µg/g)及び腎臓(1.09 µg/g)以外の組織では、放射能濃度は0.5 µg/g未満であっ  
34 た。胎児及び胎盤中の放射能濃度は、母動物の血漿中濃度と同等あるいはそれ以  
35 下であった。(参照8、9)

### ③代謝物同定・定量

#### a. 代謝物同定・定量-1

排泄試験[1. (1)④a. ]、胆汁中排泄試験[1. (1)④b. ]及び体内分布試験（反復経口投与）[1. (1)②b. ]で得られた尿、糞、胆汁、肝臓及び脂肪、乳汁移行試験[1. (1)⑤]で得られた児動物の胃内容物を試料として、代謝物同定・定量試験が実施された。

親化合物は、尿中及び胆汁中には検出されなかった。糞中では、低用量群で 6.6～14.0%TAR、高用量群で 22.6～29.0%TAR 存在し、肝臓では総残留放射能（TRR）の 22.5～30.3%、脂肪及び児動物胃内容物中では 93%TRR 以上を占めた。

児動物の胃内容物を除くいずれの試料からも、代謝物Ⅱ及びⅢが検出された。糞中では、低用量群ではⅡ及びⅢがそれぞれ 19.5～25.1 及び 13.2～13.8%TAR、高用量群ではそれぞれ 20.6～23.2 及び 7.2～8.1%TAR 存在した。胆汁中ではⅡ及びⅢはグルクロン酸または硫酸抱合体として存在し、Ⅱ及びⅢの合計で 68.9～70.8%TRR を占めた。肝臓では、Ⅱ及びⅢは遊離体及び抱合体の合計でそれぞれ 16.4～24.8 及び 3.4～6.1%TRR 存在した。尿中にはⅡ及びⅢが合計で 0.6～1.7%TAR 存在し、脂肪では合計が 2.5%TRR であった。

エトフェンプロックスのラットにおける主要代謝経路には、エトキシフェニル部の脱エチル化及びフェノキシベンジル部の 4'位の水酸化が関与されていると考えられた。（参照 8、9）

#### b. 代謝物同定・定量-2

SD ラット（一匹）に、[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスを低用量で単回経口投与し、投与 1 日後の尿及び投与 2 日後の糞を試料として、代謝物同定・定量試験が実施された。

投与後 23 時間の尿中及び糞中の排泄率は、それぞれ 11.2 及び 65.6%TAR であった。

尿及び糞中からは、代謝物Ⅳがそれぞれ 0.0009 及び 0.0018%TAR 同定された。また、代謝物ⅩⅡが尿及び糞中に微量に存在した。糞中には代謝物Ⅷも 4.0%TAR 存在した。（参照 8）

### ④排泄

#### a. 尿及び糞中排泄

SD ラット（一群雌雄各 5 匹）に <sup>14</sup>C-エトフェンプロックスを低用量または高用量で単回経口投与して、排泄試験が実施された。

投与後 48 及び 120 時間の尿及び糞中排泄率は、表 2 に示されている。

投与量にかかわらず、投与後 120 時間に、総投与放射能（TAR）の 94.4～98.8% が尿及び糞中に排泄された。主要排泄経路は、いずれの投与群も糞中であった。

(参照 8、9)

表2 投与後 48 及び 120 時間の尿中及び糞中排泄率 (%TAR)

投与量	30 mg/kg 体重				180 mg/kg 体重			
	雄		雌		雄		雌	
試料	尿	糞	尿	糞	尿	糞	尿	糞
投与後 48 時間	10.0	75.9	7.4	74.1	7.5	77.7	5.6	65.0
120 時間	10.8*	88.0	8.0*	86.4	8.2*	89.0	6.4*	90.4

注) \*: ケージ洗浄液を含む

**b. 胆汁中排泄**

胆管カニューレを挿入した SD ラット (一群雌雄各 3 匹) に  $^{14}\text{C}$ -エトフェンプロックスを低用量または高用量で単回経口投与して、胆汁中排泄試験が実施された。

投与後 48 時間の尿、糞、胆汁、肝臓及びカーカス中の排泄率は表 3 に示されている。(参照 8、9)

表3 投与後 48 時間の尿、糞及び胆汁、肝臓及びカーカス中排泄率 (%TAR)

投与量	30 mg/kg 体重		180 mg/kg 体重	
	雄	雌	雄	雌
尿	2.0	3.3	1.4	1.3
糞	75.9	49.5	77.8	75.2
胆汁	15.2	29.6	9.9	10.3
肝臓	0.05	0.2	0.2	0.04
カーカス	2.8	5.7	3.0	1.5
計	96.0	88.3	92.3	88.3

**⑤乳汁移行試験**

SD ラット (雌 3 匹) の妊娠 18 日～分娩 9 日後まで  $^{14}\text{C}$ -エトフェンプロックスを低用量で 14 日間連続経口投与し、分娩 4 日後から、非投与の母動物より生まれた児動物に授乳させ、児動物の胃内容物を採取する乳汁移行試験が実施された。

投与終了 7 時間後の胃内容物には  $47.9 \mu\text{g/g}$  の放射能が存在し、放射能が乳汁中に移行することが確認された。しかし、投与終了 31 日後には胃内容物中の放射能濃度は  $1.7 \mu\text{g/g}$  と急速に減少した。(参照 8、9)

## 1 (2) イヌ

## 2 ①吸収

## 3 a. 血漿中濃度推移

4 ビーグル犬（雌雄各2匹）に<sup>14</sup>C-エトフェンプロックスを低用量で単回経口投  
5 与し、血漿中濃度推移が検討された。

6 血漿中放射能濃度推移は表4に示されている。（参照8、9）

7  
8 表4 血漿中放射能濃度推移

性別	雄	雌
T <sub>max</sub> (時間)	2~3	0.25~1
C <sub>max</sub> (μg/g)	4.4~6.7	6.6~7.2
T <sub>1/2</sub> (時間)	10.4~18.2	12.6~14.5

9  
10 b. 吸収率

11 体内吸収率は14~51%であると推定された。（参照9）

12  
13 ②分布

14 ビーグル犬（雌雄各2匹）に<sup>14</sup>C-エトフェンプロックスを低用量で単回経口投与  
15 して、体内分布試験が実施された。

16 投与2及び4時間後肝臓で最も放射能濃度が高いのはいずれも肝臓（3.1~6.9  
17 μg/g）で、次いで腎臓（1.0~3.3 μg/g）であった。

18 胆汁中放射能濃度が高い値（815~1,040 μg/g）であったので、胆汁中排泄が吸収  
19 された放射能の主要排泄経路であることが示唆された。（参照8、9）

20  
21 ③代謝物同定・定量

22 血漿中濃度推移[1.(2)①a.]、排泄試験[1.(2)④]及び体内分布試験[1.(2)②]で  
23 得られた血漿、尿、糞、胆汁、肝臓及び脂肪を試料として、代謝物同定・定量試験  
24 が実施された。

25 親化合物は、尿中には検出されなかった。糞中には48.5~59.0%TRR、胆汁、脂  
26 肪、肝臓及び血漿中では、それぞれ3.3~4.1%TRR（グルクロン酸または硫酸抱合  
27 体として存在）、80~83%TRR、12~17%TRR（遊離体と抱合体の合計）及び25  
28 ~26%TRRを占めた。

29 脂肪以外の試料からは、化合物Ⅱ及びⅢが検出された。尿及び糞中にはⅡ及びⅢ  
30 が合計でそれぞれ1.6~1.8及び2.9~3.5%TRR存在した。胆汁、肝臓、血漿中  
31 ではそれぞれ37.3~40.5%TRR（グルクロン酸または硫酸抱合体として存在）、42~  
32 45%TRR（遊離体と抱合体の合計）及び3.2~3.7%TRR存在した。

33 エトフェンプロックスのイヌにおける主要代謝経路には、ラット同様エトキシフ

1 エニル部の脱エチル化及びフェノキシベンジル部の4'位の水酸化が関与されている  
2 と考えられた。(参照8、9)

#### 4 ④排泄

5 ビーグル犬(雌雄各2匹)に<sup>14</sup>C-エトフェンプロックスを低用量で単回経口投与  
6 して、排泄試験が実施された。

7 投与後48及び120時間の尿及び糞中排泄率は、表5に示されている。

8 投与量にかかわらず、投与後120時間に、85.0～102%TRRが尿及び糞中に排泄  
9 された。主要排泄経路は、雌雄とも糞中であつた。(参照8、9)

11 表5 投与後48及び120時間の尿中及び糞中排泄率(%TRR)

性別	雄		雌	
	尿	糞	尿	糞
試料				
投与後 48 時間	4.1～8.1*	86.0～95.8	5.4～5.9*	78.8～95.2
120 時間	4.3～8.6*	86.8～96.2	5.6～6.3*	79.4～95.7

12 注) \*: ケージ洗浄液を含む

#### 14 (3) ラット及びマウス

15 SDラット(雄2匹)及びICRマウス(雄4匹)に、<sup>14</sup>C-エトフェンプロックス  
16 をそれぞれ30及び20mg/kg体重で単回経口投与して、動物体内運命試験が実施さ  
17 れた。

18 投与後48及び96時間の尿及び糞中排泄率は表6に示されている。いずれも糞中  
19 が主要排泄経路であつた。

20 投与96時間後の肝臓、腎臓及び全血中の放射能を測定したところ、ラットで0.06  
21 ～0.17 µg/g、マウスで0.04～0.29 µg/gと、ラット及びマウスの全血中濃度(それ  
22 ぞれ0.10及び0.08 µg/mL)と同程度であり、蓄積性は低いと判断された。

23 ラット及びマウスの尿中から親化合物は検出されず、ラット及びマウスとも代謝  
24 物IX及びXIIが検出された(それぞれ0.05～1.63及び3.7～5.2%TRR)。また、親  
25 化合物の3-フェノキシベンジル基のベンゼン環に2つの水酸基が結合した代謝物が、  
26 ラット及びマウスでそれぞれ0.25及び11.8%TRRと、存在量に差が認められた。

27 ラット及びマウスの糞中から、親化合物、代謝物II及びIIIが同定された。親化合  
28 物はラット及びマウスでそれぞれ25.7及び3.1%TRR、代謝物IIはそれぞれ10.3  
29 及び13.9%TRR、IIIはそれぞれ12.0及び12.6%TRRであり、代謝物の存在量は同  
30 程度であつたが、親化合物はラットよりマウスで少なかった。(参照8)

表 6 投与後 48 及び 96 時間の尿中及び糞中排泄率 (%TAR)

動物種	ラット		マウス	
	尿	糞	尿	糞
試料				
投与後 48 時間	9.4	69.7	24.0	52.6
96 時間	9.8*	71.1	25.1*	58.5

注) \* : ケージ洗浄液を含む

## 2. 植物体内運命試験

### (1) 水稻

[pro-1-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスまたは[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスを、土耕栽培の水稻（品種：コシヒカリ）の出穂直前の止め葉 1 枚の表面に 10 µg/葉で塗布し、1 及び 2 週間後に採取した処理葉及び非処理部を試料として、植物体内運命試験が実施された。

処理 1 週後の処理葉抽出物中の放射能は 73.5～77.4%TAR であったが、2 週後に 58.8～59.1%TAR と減少し、処理葉の未抽出残渣に存在した放射能は、処理 1 週後の 4.5～5.3%TAR から処理 2 週後の 15.2～19.8%TAR と増加した。

非処理部に存在した放射能（抽出物及び未抽出残渣の合計）は、処理 1 及び 2 週後でそれぞれ 0.65～0.86 及び 0.97～1.38%TAR であった。

処理葉中の親化合物は、処理 1 週後に 46.3～46.7%TAR 存在したが、処理 2 週後には 25.8～25.9%TAR と減少し、速やかに代謝されたと考えられた。処理 2 週後の処理葉中の主要代謝物は、代謝物Ⅳ（10.4～10.7%TAR）及びⅡ（4.1%TAR）であった。[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックス処理区にのみ、代謝物Ⅷが 3.9%TAR 存在し、また、[pro-1-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックス処理区にのみ、代謝物Ⅹが 4.0～5.5%TAR 存在した。その他両処理区で代謝物Ⅴ、Ⅶ及びⅨが存在したが、いずれも 2%TAR を超えなかった。

また、[pro-1-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスまたは[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスを、土耕栽培の水稻（品種：日本晴）の出穂直前の止め葉 1 枚の表面に 10 µg/葉で塗布し、6 週間後まで栽培する試験も実施された。

処理 6 週後、非処理部の種子に存在した放射能（抽出物及び未抽出残渣の合計）は 0.46～0.55%TAR であり、処理したエトフェンプロックスの可食部への移行はごくわずかであると考えられた。（参照 8）

### (2) さやいんげん

[pro-1-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスまたは[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスを、水耕栽培のさやいんげん（品種：サーベル）の発芽 14 日後の 2 葉期幼苗の葉 1 枚に、10 µg/葉で塗布し、処理 1、2 及び 3 週後に採取した処理葉、非処理部の茎葉部及び根部を試料として、植物体内運命試験が実施された。

1 さやいんげん試料中放射能分布は、表7に示されている。非処理部に移行した放  
2 射能は、1% TAR 未満であった。

3 処理葉中の親化合物は、処理1週後に68.0～73.6% TARであったが、処理3週後  
4 には46.5～49.0% TARに減少した。処理3週後の主要代謝物は両標識体処理区でIV  
5 (11.1～14.7% TAR)であった。また、[pro-1-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックス処理区で  
6 はIX及びXがそれぞれ11.4及び3.9% TAR、[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックス処理区  
7 ではVII及びVIIIがそれぞれ9.2及び3.7% TAR存在した。(参照8)

8  
9 表7 さやいんげん試料中放射能分布(%TAR)

標識体	[pro-1- <sup>14</sup> C]エトフェンプロックス			[ben- <sup>14</sup> C]エトフェンプロックス			
	試料	処理葉	非処理部		処理葉	非処理部	
			茎葉部	根部		茎葉部	根部
処理1週後	90.3	0.32	0.02	88.1	0.79	0.02	
3週後	82.4	0.12	0.38	85.3	—	—	

10 注) — : 定量限界未満

11  
12 (3) ぶどう

13 [pro-2-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックス及び[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスの等量混合  
14 物を、圃場栽培のぶどう(品種: Verdelet)樹に300 g ai/ha(通常処理区)または  
15 3,000 g ai/ha(10倍処理区)で散布し、散布14及び28日後に採取した果実を試料  
16 として、植物体内運命試験が実施された。

17 ぶどう試料中放射能分布は、表8に示されている。放射能の大部分(59.7～  
18 82.1% TRR)は、果実房表面洗浄液中に存在した。

19 果実、皮及び種子抽出物中に、親化合物は散布14日後に7.7～10.9% TRR(通常  
20 処理区で0.59 mg/kg、10倍処理区で4.51 mg/kg)、散布28日後に12.4～15.1% TRR  
21 (通常処理区で0.33 mg/kg、10倍処理区で4.26 mg/kg)存在した。同定された代  
22 謝物はいずれの処理区、採取時期でもIVのみであり、散布14日後に0.33～  
23 0.56% TRR、散布28日後に0.73～1.06% TRR存在した。

24 果汁中には親化合物は検出されず、同定された代謝物もなかった。

25 果実房洗浄液中の成分はほとんどが親化合物であり、54.2～76.8% TRR存在した。  
26 また、代謝物IVが3.1～6.0% TRR存在した。(参照8)

1 表8 ぶどう試料中放射能分布 (mg/kg)

処理量	300 g ai/ha (通常処理区)			3,000 g ai/ha (10倍処理区)		
	果実房 洗浄液	果実	果柄	果実房 洗浄液	果実	果柄
散布 14日後	4.46 (82.1)	0.76 (13.9)	0.22 (4.0)	47.2 (80.9)	6.89 (11.8)	4.28 (7.3)
28日後	2.00 (75.2)	0.52 (19.5)	0.14 (5.3)	16.8 (59.7)	6.53 (23.2)	4.83 (17.1)

2 注) ( ) 内は%TRR

3  
4 (4) なたね

5 [pro-2-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックス及び[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスの等量混  
6 合物を土耕栽培のなたね(品種: Express)の播種約7カ月後に、120 g ai/ha (通  
7 常処理区)または1,200 g ai/ha (10倍処理区)で散布し、散布56日後に採取した  
8 種子及び葉を試料として、植物体内運命試験が実施された。

9 なたね試料中放射能分布は、表9に示されている。種子及び葉に存在した放射能  
10 の合計は、通常処理区及び10倍処理区でそれぞれ3.3及び7.6%TRRであった。

11 種子試料中には、親化合物が56.5~62.1%TRR(通常処理区で0.02 mg/kg、10  
12 倍処理区で0.14 mg/kg)存在した。代謝物はII、III、IV、VII、VIII、IX、及びXIが  
13 同定されたが、IV(3.2~4.9%TRR)以外は1%TRRを超えなかった。

14 葉試料中には、親化合物及び代謝物IVのみが同定された。親化合物は通常処理区  
15 で7.9%TRR(0.009 mg/kg)、10倍処理区で35.2%TRR(1.33 mg/kg)、代謝物IV  
16 は通常処理区で1.1%TRR(0.001 mg/kg)、10倍処理区で5.2%TRR(0.203 mg/kg)  
17 であった。(参照8)

18  
19 表9 なたね試料中放射能分布 (mg/kg)

処理量	120 g ai/ha (通常処理区)				1,200 g ai/ha (10倍処理区)			
	種子		葉		種子		葉	
	抽出物	非抽出 残渣	抽出物	非抽出 残渣	抽出物	非抽出 残渣	抽出物	非抽出 残渣
	0.025 (77.6)	0.007 (22.4)	0.100 (89.6)	0.012 (10.4)	0.184 (72.6)	0.069 (27.4)	3.50 (92.4)	0.29 (7.6)

20 注) ( ) 内は%TRR

21  
22 3. 土壌中運命試験

## 23 (1) 湛水土壌中運命試験

24 [pro-1-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスまたは[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスを埴壤土

1 (埼玉及び栃木)に乾土あたり1 mg/kgの濃度で添加し、25~30°C、明条件または  
2 暗条件で7または12週間インキュベートする湛水土壌中運命試験が実施された。

3 明条件下では、土壌よりメタノール抽出された放射能は試験開始7週後で29.8~  
4 43.8%TARであり、明条件下におけるエトフェンプロックスの推定半減期は2~3  
5 週間と算出された。

6 暗条件下では、試験開始10~12週後の抽出性放射能は70.2~91.0%TARであり、  
7 抽出物中に未変化の親化合物が64.6~87.2%TAR存在した。(参照8)

## 9 (2) 好氣的土壌中運命試験

10 [pro-1-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスまたは[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスを砂壤土  
11 (山梨)及び軽埴土(千葉及び静岡)に乾土あたり1 mg/kgの濃度で添加し、25°C、  
12 暗所で最長8週間インキュベートする好氣的土壌中運命試験が実施された。

13 非滅菌土壌(暗条件)において、メタノール抽出性放射能は試験開始3週間後に  
14 20.2~26.5%TARであった。親化合物は経時的に減少し、試験開始3週間後には13.9  
15 ~16.2%TARとなった。いずれの処理区でも、エトフェンプロックスの好氣的土壌  
16 における推定半減期は6~9日と算出された。

17 非滅菌土壌における主要分解物はIV及びVであった。IVは試験開始1週後に2.6  
18 ~7.1%TARであったが、試験開始2週後には1.4~3.4%TARに減少した。Vは試  
19 験開始1及び2週後でそれぞれ1.4~4.0及び1.3~2.7%TARであった。

20 千葉土壌のみ、<sup>14</sup>CO<sub>2</sub>発生量を測定したところ、試験開始8週間までに<sup>14</sup>CO<sub>2</sub>は  
21 31.7~44.2%TAR発生した。

22 山梨土壌について、滅菌及び非滅菌土壌を用い、明条件及び暗条件下でインキュ  
23 ベートする試験も併せて実施したところ、光条件にかかわらず、試験開始2週後に  
24 エトフェンプロックスは約95%TAR残存し、ほとんど分解は認められなかった。

25 (参照8)

## 27 (3) ガラス表面光分解試験

28 [pro-2-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスまたは[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックス 200 µg  
29 をガラスシャーレ表面に塗布し、人工光(光量:30,000lx)を25~30°Cで14日間  
30 照射(13時間-明、11時間-暗)する光分解試験が実施された。

31 エトフェンプロックスの分解は速やかであり、試験終了時には1.9~5.7%TARに  
32 減少していた。推定半減期は両標識体とも約4日と算出された。主要分解物はIVで  
33 あり、経時的に増加して、試験終了時に25.5~26.8%TAR存在した。

34 また、[pro-2-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックスまたは[ben-<sup>14</sup>C]エトフェンプロックス  
35 1mgを石英フラスコ底部に塗布し、キセノン光(光強度:5.5 W/m<sup>2</sup>)を7週間照射  
36 する光分解試験が実施された。

37 エトフェンプロックスは、試験終了時には16.8~18.3%TARに減少した。主要分  
38 解物はIVであり、試験終了時に23.7~26.5%TAR存在した。(参照8)

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38

#### (4) 土壤吸脱着試験

4種類の国内土壌(埴壤土、シルト質壤土、壤土及び壤質砂土、採取地不明)及び1種類の国内土壌[壤土(茨城)]を用いて土壌吸着試験が実施された。

Freundlichの吸着係数 $K_{ads}$ は158~119,000、有機炭素含有率により補正した吸着係数 $K_{oc}$ は5,780~4,200,000、脱着係数 $K_{des}$ は14~111,000、有機炭素含有率により補正した脱着係数 $K_{des_{oc}}$ は378~4,100,000であった。(参照8)

#### (5) 土壤溶脱性(リーチング)試験

3種類の土壌[砂壤土(山梨)及び軽埴土(静岡及び千葉)]に、[pro-1- $^{14}C$ ]エトフェンプロックスまたは[ben- $^{14}C$ ]エトフェンプロックスを1 mg/kgで添加した。それらをエトフェンプロックス無添加の土壌を充填したガラスカラム(4 cm×50 cm)の上部に5 cmとなるように加え、カラム保水量の3~5倍の蒸留水を流して、土壌溶脱性試験が実施された。また、標識化合物を添加した後2週間インキュベートした土壌を用いて、同様にガラスカラムの上に加え、土壌溶脱性試験が実施された。

浸出液中の放射能は、いずれの試験区もわずかであり、最大でも4.0% TAR以下であった。

土壌カラム中の放射能は、上部5 cmに、土壌中の90% TRR以上が存在した。

(参照8)

### 4. 水中運命試験

#### (1) 加水分解試験

非標識エトフェンプロックスを、pH 5(フタル酸緩衝液)、pH 7(リン酸緩衝液)及びpH 9(ホウ酸緩衝液)の各滅菌緩衝液に4 mg/Lの濃度で添加し、25±1℃、暗所条件下で181日間インキュベートする加水分解試験が実施された。

いずれの緩衝液中も、試験終了時に親化合物は3.4~3.8 mg/L存在し、エトフェンプロックスは加水分解に対し安定であると考えられた。

各pHにおける推定半減期は、いずれも1年以上と考えられた。(参照8)

#### (2) 水中光分解試験

[pro-2- $^{14}C$ ]エトフェンプロックス及び[ben- $^{14}C$ ]エトフェンプロックスの等量混合物を、pH 7のリン酸緩衝液(滅菌)または自然水(池水、スイス、pH不明、滅菌)に0.29 mg/Lの濃度で添加し、キセノン光(光強度:17.2 W/m<sup>2</sup>、測定波長:300~400 nm)を25±1℃で15日間連続照射する水中光分解試験が実施された。

エトフェンプロックスの、緩衝液及び自然水における推定半減期(一次反応速度式)は、それぞれ4.7及び7.9日と算出され、東京、春の太陽光下に換算するとそれぞれ10.4及び17.5日と算出された。

緩衝液及び自然水中いずれも、分解物IV、VIII及びIXが存在した。IV及びIXは経時

的に増加し、試験終了時の緩衝液中のIV及びIXはそれぞれ 63.6 及び 12.0%TRR、  
自然水中のIV及びIXはそれぞれ 37.8 及び 14.4%TRR であった。分解物VIIIは試験開  
始 13.5 日以降に出現し、3.8～5.0%TRR 存在した。(参照 8)

### (3) 田面水中における減衰試験

エトフェンプロックス粒剤を 900 g ai/ha で水田に散布し、田面水中における減  
衰試験が実施された。

田面水中のエトフェンプロックス濃度は、散布 2 日後に最大 0.044 ppm を示した  
が、その後急速に減衰し、散布 14～21 日後には検出限界 (0.002 ppm) 以下とな  
った。(参照 8)

## 5. 土壌残留試験

火山灰土・壤土(茨城)、沖積土・埴壤土(①埼玉、②高知)、洪積土・埴壤土(静  
岡)及び火山灰土・軽埴土(茨城)を用い、エトフェンプロックス及び分解物IVを分  
析対象化合物とした土壌残留試験(容器内及び圃場)が実施された。エトフェンプロ  
ックスの推定半減期は表 10 に示されている。分解物IVは分析値が試験期間中分析値  
は検出限界に近い値であり、推定半減期は算出されなかった。(参照 8)

表 10 土壌残留試験成績

試験		濃度*	土壌	推定半減期(日)
				エトフェンプロックス
容器内 試験	水田	1 mg/kg	火山灰土・壤土	≥545
			沖積土・埴壤土①	≥545
	畑地	0.5 mg/kg	火山灰土・壤土	11
			洪積土・埴壤土	15
		10 mg/kg	火山灰土・軽埴土	3
			沖積土・埴壤土②	18
圃場 試験	水田	400 <sup>EC</sup> + 900 <sup>G</sup> g ai/ha	火山灰土・壤土	79
			沖積・埴壤土①	62
	畑地	160～200 <sup>WP</sup> ×3 g ai/ha	火山灰土・洪積土	39
			洪積土・埴壤土	9
		9000 <sup>EC</sup> ×3 g ai/ha	火山灰土・軽埴土	17
			沖積土・埴壤土②	5

注) \* : 容器内試験で純品、圃場試験で EC : 乳剤、G : 粒剤、WP : 水和剤を使用

## 6. 作物等残留試験

### (1) 作物残留試験

1 3 4 5 6 7 8  
水稲、穀類、野菜、果実、豆類及び茶を用い、エトフェンプロックス及び代謝物IVを分析対象化合物とした作物残留試験が実施された。結果は別紙3に示されている。エトフェンプロックスの最大残留値は、最終散布14日後に収穫したみかん（果皮）の11.4 mg/kg、代謝物IVの最大残留値は、最終散布28日後に収穫した夏みかん（果皮）の1.15 mg/kgであった。（参照8）

### (2) 魚介類における最大推定残留値

9 10 11 12 13 14  
エトフェンプロックスの公共用水域における水産動植物被害予測濃度（水産PEC）及び生物濃縮係数（BCF）を基に、魚介類の最大推定残留値が算出された。エトフェンプロックスの水産PECは0.036 µg/L、BCFは3,960（試験魚種：ブルーギル）、魚介類における最大推定残留値は0.713 mg/kgであった。（参照11）

## 7. 乳汁移行試験

15 16 17  
ホルスタイン種泌乳牛（一群1～2頭）に、エトフェンプロックスを7日間連続飼料から混入投与（原体：22.5及び45 mg/個体/日）する乳汁移行試験が実施された。

18 19 20 21 22  
その結果、22.5 mg/個体/日投与群では試験開始から最終投与5日後まで、乳汁中のエトフェンプロックスは検出限界未満（<0.05 mg/kg）であったが、45 mg/kg体重/日投与群では、投与開始3日後から最終投与1日後まで、0.06～0.09 mg/kgのエトフェンプロックスが乳汁中に検出された。しかし、最終投与3日後から試験終了時まで、検出限界未満であった。

23 24  
また、ホルスタイン種泌乳牛（一群3頭）に、エトフェンプロックスを28～30日間混餌（原体：0、10、30及び1,000 mg/個体/日）投与する乳汁移行試験が実施された。

25 26 27 28 29  
10 mg/個体/日投与群では、投与期間中エトフェンプロックスは検出限界未満（<0.05 mg/kg）であった。30 mg/個体/日投与群では、投与開始7及び14日後に0.05 mg/kgのエトフェンプロックスが検出されたが、他の時期では検出限界未満であった。1,000 mg/個体/日投与群では、試験開始2～28日後まで乳汁中に0.66～2.11 mg/kgのエトフェンプロックスが検出された。（参照8）

## 8. 一般薬理試験

30 31 32 33 34  
マウス、ネコ、ラット、イヌ、モルモット及びウサギを用いた一般薬理試験が実施された。結果は表11に示されている。（参照8、9）

1

表11 一般薬理試験概要

試験の種類	動物種	動物数/群	投与量 (mg/kg 体重) (投与経路)	最大 無作用量 (mg/kg 体重)	最小 作用量 (mg/kg 体重)	結果の概要	
中枢神経系	自発運動量	ddY マウス	雄 10	0、25,000、 50,000 (経口) <sup>1)</sup>	25,000	50,000	50,000 mg/kg 体重 で有意な抑制、 25,000 mg/kg 体重 では低下傾向
	チオペンタール 睡眠時間	ddY マウス	雄 10	0、12,500、 25,000、 50,000 (経口) <sup>1)</sup>	2,5000	50,000	50,000 mg/kg 体重 で睡眠時間の有意 な延長、 25,000 mg/kg 体重 では延長傾向
	抗痙攣作用	ddY マウス	雄 9~10	0、5,000、 50,000 (経口) <sup>1)</sup>	50,000	—	ペンテトラゾール、 ストリキニーネ及 び電撃誘発痙攣に 対し影響なし
	傾斜板順応	ddY マウス	雄 9~10	0、5,000、 50,000 (経口) <sup>1)</sup>	50,000	—	影響なし
	体温	ddY マウス	雄 10	0、25,000、 50,000 (経口) <sup>1)</sup>	50,000	—	影響なし
	脊髄反射電位	雑種 ネコ	雌雄 5	125~1,000 (累積投与) <sup>1)</sup> (十二指腸内)	1,000	—	影響なし
	脳波	Wistar ラット	雄 10	0、1,000、 10,000 (経口) <sup>1)</sup>	—	1,000	1,000 mg/kg 体重で 前頭葉脳波に変化、 48 時間後に回復
自律神経系	瞬膜収縮反応	雑種 ネコ	雌雄 4	10~100 (静脈内) <sup>2)</sup>	100	—	影響なし
体性神経系	腓腹筋収縮	Wistar ラット	雄 4	12.5~100 (静脈内) <sup>2)</sup>	100	—	影響なし
呼吸・循環器系	呼吸・血圧・心 電図	雑種 イヌ	雌雄 10	1、3、10、 30、100 (静脈内) <sup>2)</sup>	10	30	100 mg/kg 体重で 一過性に呼吸・血圧 及び心拍数へ影響、 30 mg/kg 体重で一 過性に呼吸へ影響
	摘出心房	Hartley モルモット	雄 16	$1 \times 10^{-5} \sim$ $1 \times 10^{-3} \text{ M}$	$1 \times 10^{-4} \text{ M}$	$1 \times 10^{-3} \text{ M}$	$1 \times 10^{-3} \text{ M}$ まで単独 作用なし

試験の種類	動物種	動物数/群	投与量 (mg/kg 体重) (投与経路)	最大 無作用量 (mg/kg 体重)	最小 作用量 (mg/kg 体重)	結果の概要	
			( <i>in vitro</i> )			1×10 <sup>-3</sup> M で ACh の作用を抑制	
平滑筋	摘出回腸	Hartley モルモット	雄 20	1×10 <sup>-6</sup> ~ 1×10 <sup>-4</sup> M ( <i>in vitro</i> )	1×10 <sup>-4</sup> M	—	影響なし
	摘出回腸	日本白色種 ウサギ	雄 5	1×10 <sup>-6</sup> ~ 1×10 <sup>-3</sup> M ( <i>in vitro</i> )	3×10 <sup>-6</sup> M	1×10 <sup>-5</sup> M	1×10 <sup>-5</sup> ~1×10 <sup>-3</sup> M で軽度の緊張低下。
	炭末輸送能	ddY マウス	雄 9~10	0, 12,500, 25,000, 50,000 (経口) <sup>1)</sup>	50,000	—	影響なし
	輸精管	Wistar ラット	雄 8	1×10 <sup>-5</sup> ~ 1×10 <sup>-3</sup> M ( <i>in vitro</i> )	1×10 <sup>-3</sup> M	—	影響なし
	摘出子宮	Wistar ラット	雌 23	1×10 <sup>-6</sup> ~ 1×10 <sup>-4</sup> M ( <i>in vitro</i> )	1×10 <sup>-4</sup> M	—	影響なし
尿量、 尿中電解質	Wistar ラット	雄 6~7	0, 10,000, 20,000 (経口) <sup>1)</sup>	—	10,000	10,000 mg/kg 体重以上で、投与後 5 時間の尿量、ナトリウム及びクロール排泄量が減少	
血液	血清 生化学的検査 (ラット)	Wistar ラット	雄 7~8	0, 10,000, 20,000 (経口) <sup>1)</sup>	—	10,000	10,000 mg/kg 体重で、投与 1 時間後に Glu、AST 及び ALT 増加傾向、3 時間後に回復
	血液凝固 (ラット)	Wistar ラット	雄 6	0, 10,000, 20,000 (経口) <sup>1)</sup>	—	20,000	20,000 mg/kg 体重で、投与 24 時間後 PT 延長、APTT 及びフィブリンーゲン量に影響せず

1 — : 最大作用量または最小無毒性量を設定できなかった。

2 溶媒は 1)原液、2)DMF を用いた

3

## 9. 急性毒性試験

## (1) 急性毒性試験

エトフェンプロックス（原体）の急性毒性試験が実施された。結果は表 12 に示されている。（参照 8、9）

表 12 急性毒性試験結果概要（原体）

投与経路	動物種	LD <sub>50</sub> (mg/kg 体重)		観察された症状
		雄	雌	
経口	SD ラット 雌雄各 10 匹	>42,900	>42,900	立毛、自発運動低下、灰白色の軟便、下痢、体毛汚染 死亡例なし
	ICR マウス 雌雄各 10 匹	>107,000	>107,000	下痢、呼吸速迫、体毛汚染、立毛、腹部膨満 50 mg/kg 体重以上で死亡例
	ビーグル犬 雌雄各 1 匹	>5,000	>5,000	症状及び死亡例なし
経皮	SD ラット 雌雄各 10 匹	>2,140	>2,140	自発運動低下、うずくまり 死亡例なし
	ICR マウス 雌雄各 10 匹	>2,140	>2,140	症状及び死亡例なし
腹腔内	SD ラット 雌雄各 10 匹	>42,900	>42,900	立毛、軟便、下痢 死亡例なし
	ICR マウス 雌雄各 10 匹	>53,600	13,400- 26,800	自発運動低下、顔面浮腫、腹部膨満、軟便、立毛 6.25 mg/kg 体重以上で死亡例
皮下	SD ラット 雌雄各 10 匹	>32,200	>32,200	立毛、うずくまり、灰白色の軟便、体毛汚染 死亡例なし
	ICR マウス 雌雄各 10 匹	>53,600	>53,600	症状及び死亡例なし
吸入	Wistar ラット 雌雄各 5 匹	LC <sub>50</sub> (mg/L)		閉眼、半眼、異常姿勢、異常呼吸、嗜眠、脱毛、自発運動亢進 死亡例なし
		>5.9	>5.9	

代謝物 II 及び IV を用いた急性毒性試験が実施された。結果は表 13 に示されている。（参照 8、9）

1 表 13 急性毒性試験結果概要（代謝物Ⅱ及びⅣ）

被験物質	投与経路	動物種	LD <sub>50</sub> (mg/kg 体重)		観察された症状
			雄	雌	
Ⅱ	経口	SD ラット 雌雄各 5 匹	>5,000	>5,000	症状及び死亡例なし
Ⅳ	経口	SD ラット 雌雄各 5 匹	>5,000	>5,000	一過性の運動低下 死亡例なし

2

## 3 (2) 急性神経毒性試験

4 SD ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた単回強制経口（原体：0、25、125、500 及  
5 び 2,000 mg/kg 体重、溶媒：1.0%MC 水溶液）投与による急性神経毒性試験が実施  
6 された。

7 検体投与の影響は認められなかったので、本試験における無毒性量は雌雄とも本  
8 試験の最高用量 2,000 mg/kg 体重であると考えられた。神経毒性は認められなかつ  
9 た。（参照 8）

10

## 11 10. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験

12 日本白色種ウサギを用いた眼刺激性試験及び皮膚刺激性試験が実施された。その  
13 結果、エトフェンプロックスは眼及び皮膚に対し刺激性を示さなかった。

14 Hartley モルモットを用いた皮膚感作性試験（Maximization 法）が実施され、皮  
15 膚感作性は陰性であった。（参照 8、9）

16

## 17 11. 亜急性毒性試験

## 18 (1) 90 日間亜急性毒性試験（ラット）①

19 SD ラット（一群雌雄各 20 匹）を用いた混餌（原体：0、50、300、1,800 及び  
20 10,800 ppm）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

21 各投与群に認められた毒性所見は表 14 に示されている。

22 本試験において、1,800 ppm 以上投与群の雄で AST、ALT 及び T.Chol 増加等が、  
23 10,800 ppm 投与群の雌で体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は雄で 300  
24 ppm（20 mg/kg 体重/日）、雌で 1,800 ppm（142 mg/kg 体重/日）であると考えら  
25 れた。（参照 8、9）

26

1 表14 90日間亜急性毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
10,800 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制</li> <li>・PT、APTT 延長</li> <li>・LDH 増加</li> <li>・肝及び副腎絶対及び比重量<sup>2</sup>増加、甲状腺比重量増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制、摂餌量減少</li> <li>・副腎及び肝絶対及び比重量増加、甲状腺比重量増加</li> <li>・小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>・甲状腺微小ろ胞の増加</li> <li>・肝腫大</li> </ul>
1,800 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・AST、ALT、T.Chol 増加、T<sub>4</sub> 減少</li> <li>・甲状腺絶対重量増加</li> <li>・肝腫大</li> <li>・甲状腺微小ろ胞の増加</li> </ul>	1,800 ppm 以下毒性所見なし
300 ppm 以下	毒性所見なし	

2

## 3 (2) 90日間亜急性毒性試験（ラット）②

4 Wistar ラット（一群雌雄各 15 匹）を用いた混餌（原体：0、50、300、1,800 及  
5 び 10,800 ppm）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

6 10,800 ppm 投与群の雄は、投与開始 7～62 日後までに 5 例が死亡、10 例が切迫  
7 と殺された。各投与群に認められた毒性所見は表 15 に示されている。

8 本試験において、1,800 ppm 以上投与群の雄で体重増加抑制等が、雌で T<sub>3</sub> 及び  
9 T<sub>4</sub> 増加等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 300 ppm（雄：22.7 mg/kg 体重/  
10 日、雌：23.5 mg/kg 体重/日）であると考えられた。（参照 8）

11

12

表15 90日間亜急性毒性試験（ラット）②で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
10,800 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・摂餌量、飲水量減少</li> <li>・PT 延長</li> <li>・胸腺うっ血及び出血</li> <li>・小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>・精巣上皮細胞変性</li> <li>・精巣上体出血</li> <li>・精巣上体精子肉芽腫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制、摂餌量、飲水量減少</li> <li>・ALP、T.Chol 増加、Glu 減少</li> <li>・肝、副腎及び甲状腺絶対及び比重量増加</li> </ul>
1,800 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制</li> <li>・甲状腺絶対及び比重量増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・T<sub>3</sub>、T<sub>4</sub> 増加</li> <li>・小葉中心性肝細胞肥大</li> </ul>
300 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

<sup>2</sup> 体重比重量を比重量という（以下同じ）。

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32

### (3) 90 日間亜急性毒性試験（マウス）

ICR マウス（一群雌雄各 20 匹）を用いた混餌（原体：0、50、500、3,000 及び 15,000 ppm）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

15,000 ppm 投与群の雌雄各 1 例が死亡した。また、同群の雌雄各 1 例が、健康状態の悪化のため、切迫と殺された。

15,000 ppm 投与群の雌雄で一般症状（立毛、前屈姿勢、削瘦、貧血、呼吸困難、振戦、不安定歩行及び嗜眠）、顕著な体重増加抑制、摂餌量減少、飲水量増加、RBC、Hb、Ht 減少、Lym または Neu の増加を伴う WBC 増加、Glu 減少、腎絶対及び比重量増加、尿比重減少、腎皮質癒痕、腎の蒼白化、腎尿細管好塩基性変化、腎尿細管拡張、腎盂拡張、小葉中心性肝細胞肥大、脾白脾髄充実度の増加、リンパ節の反応性変化、胸腺細胞充実度の減少が、同群の雌で BUN、T.Chol 増加、尿中血色素陽性個体の増加、腎腫大が認められた。

本試験において、15,000 ppm 投与群の雌雄で顕著な体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は、雌雄とも 3,000 ppm（雄：375 mg/kg 体重/日、雌：390 mg/kg 体重/日）であると考えられた。（参照 8）

### (4) 90 日間亜急性神経毒性試験（ラット）

SD ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた混餌（原体：0、2,500、5,000 及び 10,000 ppm）投与による 90 日間亜急性神経毒性試験が実施された。

10,000 ppm 投与群の雌で肝絶対及び比重量増加が、5,000 ppm 以上投与群の雄で肝絶対重量増加が、2,500 ppm 以上投与群の雄で肝比重量増加が認められた。

いずれの投与群でも、機能観察総合検査（FOB）、自発運動量、神経病理組織学的検査において検体投与の影響は認められなかった。

本試験において、2,500 ppm 以上投与群の雄で肝比重量増加が、10,000 ppm 投与群の雌で肝絶対または比重量増加が認められたので、無毒性量は雄で 2,500 ppm 未満（149 mg/kg 体重/日未満）、雌で 5,000 ppm（350 mg/kg 体重/日）であると考えられた。神経毒性は認められなかった。（参照 8）

#### 【事務局より】

2,500 ppm 投与群の雄で認められた所見が「肝比重量増加」のみなのですが（下線部）、部会での審議時に、この試験では肝臓の生化学検査、病理組織学的検査等が実施されていないことから、この比重量増加はむしろ毒性と取った方がよい、という結論となりました。

#### 【吉田委員より】了解しました。

### (5) 90 日間亜急性吸入毒性試験（ラット）

Wistar ラット（一群雌雄各 15 匹）を用いた吸入（原体：0、0.042、0.21 及び 1.01 mg/L、全身暴露、6 時間/日、6 日/週）暴露による 90 日間亜急性吸入毒性試験

1 が実施された。

2 1.01 mg/L 暴露群の雌雄で、肝及び甲状腺絶対重量増加、小葉中心性肝細胞肥大  
3 が、同群の雄で甲状腺小型ろ胞増加及びろ胞上皮高増加が認められたので、無毒性  
4 量は、雌雄とも 0.21 mg/L であると考えられた。（参照 8）

#### 5 6 **（6）28 日間亜急性経皮毒性試験（ウサギ）**

7 NZW ウサギ（一群雌雄各 10 匹）を用いた経皮（原体：0、400、650 及び 1,000  
8 mg/kg 体重/日、6 時間/日、毎日投与）投与による 28 日間亜急性経皮毒性試験が実  
9 施された。また、対照群及び最高用量群（1,000 mg/kg 体重/日）は、別に一群（雌  
10 雄各 10 匹）を設け、28 日間の投与期間後、14 日間の回復期間を置いた。

11 全投与群の雌雄で、痂皮、落屑、真皮び慢性細胞浸潤、表皮過形成等の皮膚変化  
12 が認められたが、回復期間終了後には皮膚所見の頻度、程度が低下したことから、  
13 これは検体を繰り返し塗布したことによる物理的刺激によるものと考えられ、投与  
14 を中止することによって回復すると考えられた。その他、検体投与の影響は認めら  
15 れなかった。

16 本試験における無毒性量は、雌雄とも本試験の最高用量 1,000 mg/kg 体重/日であ  
17 ると考えられた。（参照 8）

#### 18 19 **（7）90 日間亜急性毒性試験（ラット：代謝物Ⅳ）**

20 SD ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた混餌（代謝物Ⅳ：0、50、700 及び 10,000  
21 ppm）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

22 10,000 ppm 投与群の雌雄で、体重増加抑制、ALP 及び AST 増加、T<sub>4</sub>、T.Chol  
23 及び Glob 減少、同群の雌で WBC 増加、肝、腎及び胸腺比重量増加、腎尿細管上  
24 皮過形成が認められた。

25 本試験において、10,000 ppm 以上投与群の雌雄で体重増加抑制等が認められた  
26 ので、無毒性量は雌雄とも 700 ppm（雄：54 mg/kg 体重/日、雌：64 mg/kg 体重/  
27 日）であると考えられた。（参照 9）

### 28 29 **1 2. 慢性毒性試験及び発がん性試験**

#### 30 **（1）1 年間慢性毒性試験（イヌ）**

31 ビーグル犬（一群雌雄各 4 匹）を用いた混餌（原体：0、100、1,000 及び 10,000  
32 ppm）投与による 1 年間慢性毒性試験が実施された。また、対照群及び最高用量群  
33 （10,000 ppm）は、別に一群（雌雄各 2 匹）を設け、投与期間終了後、8 週間の回  
34 復期間を置いた。

35 10,000 ppm 投与群の雌雄で TP 及び Alb 減少、ALP 増加ならびに肝絶対及び比  
36 重量増加が、同群の雄で T.Chol 減少が、雌で小葉中心性肝細胞肥大が認められた。

37 これらの所見は、いずれも回復期間終了時には対照群と差は認められなかった。

38 本試験において、10,000 ppm 投与群の雌雄で TP 及び Alb 減少、ALP 増加等が

1 認められたので、無毒性量は雌雄とも 1,000 ppm（雄：33.4 mg/kg 体重/日、雌：  
2 32.2 mg/kg 体重/日）であると考えられた。（参照 8、9）

3

4 **（2）2年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）**

5 SD ラット（主群：一群雌雄各 50 匹、中間と殺群：一群雌雄各 20 匹）を用いた  
6 混餌（原体：0、30、100、700 及び 4,900 ppm）投与による 2 年間慢性毒性/発が  
7 ん性併合試験が実施された。

8 各投与群に認められた毒性所見（非腫瘍性病変）は表 16 に、甲状腺腫瘍の発生  
9 頻度は表 17 に示されている。

10 対照群と投与群で死亡率に差は認められなかった。

11 4,900 ppm 投与群の雌で甲状腺ろ胞細胞腺腫の発生頻度が増加した。これは、エ  
12 トフェンプロックス投与による甲状腺ホルモン分解酵素誘導に伴う TSH 増加が関  
13 与している可能性が示唆された。（メカニズム試験については[15.]参照）

14 本試験において、700 ppm 以上投与群の雄で変異肝細胞巣（好酸性/空胞）等が、  
15 4,900 ppm 投与群の雌で体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は雄で  
16 100ppm（3.7 mg/kg 体重/日）、雌で 700 ppm（34.3 mg/kg 体重/日）であると考  
17 えられた。（参照 8）

18

19 **表 16 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）で認められた毒性所見**  
20 **（非腫瘍性病変）**

投与群	雄	雌
4,900 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体重増加抑制、飲水量減少</li> <li>・ トロンボテスト時間延長</li> <li>・ 肝絶対及び比重量増加</li> <li>・ 小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>・ 肝内胆管増生</li> <li>・ 肝内胆管周囲炎</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体重増加抑制、飲水量減少</li> <li>・ 肝絶対及び比重量増加</li> <li>・ 肝腫大</li> <li>・ 小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>・ 変異肝細胞巣（好酸性/空胞）</li> <li>・ 甲状腺ろ胞囊胞</li> </ul>
700 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 甲状腺絶対重量増加</li> <li>・ 変異肝細胞巣（好酸性/空胞）</li> </ul>	700 ppm 以下毒性所見なし
100 ppm 以下	毒性所見なし	

21

1 表17 甲状腺腫瘍の発生頻度（全動物）

投与群(ppm)	雄					雌				
	0	30	100	700	4,900	0	30	100	700	4,900
検査動物数	49	50	50	50	50	49	50	50	50	50
甲状腺ろ胞細胞腺腫	6	6	4	5	11	0	3	2	0	9*
ろ胞細胞癌	0	0	1	3	2	0	0	0	2	1
合計	6	6	5	8	13	0	3	2	2	9*#

2 Fisherの直接確率法 \* : p&lt;0.01

3 Petoの検定 # : p&lt;0.05

4

## 5 (3) 2年間発がん性試験（マウス）

6 ICR マウス（主群：一群雌雄各 52 匹、中間と殺群：一群雌雄各 24 匹）を用いた  
7 混餌（0、30、100、700 及び 4,900 ppm）投与による 2 年間発がん性試験が実施さ  
8 れた。

9 各投与群に認められた毒性所見は表 18 に示されている。4,900 ppm 投与群の雄  
10 で死亡率が増加したが、これは腎病変の発生率増加が原因であると考えられた。

11 検体投与に関連して発生頻度が増加した腫瘍性病変はなかった。

12 本試験において、100 ppm 以上投与群の雌雄で腎尿細管好塩基性変化が認められ  
13 たので、無毒性量は雌雄とも 30 ppm（雄：3.1 mg/kg 体重/日、雌：3.6 mg/kg 体重  
14 /日）であると考えられた。発がん性は認められなかった。（参照 8、9）

15

16 表 18 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（マウス）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
4,900 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・死亡率増加</li> <li>・体重増加抑制</li> <li>・Hb、RBC、MCHC 減少、MCV 増加</li> <li>・腎皮質癒痕</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制</li> <li>・飲水量増加</li> <li>・肝絶対及び比重量増加</li> </ul>
700 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飲水量増加</li> <li>・腎蒼白化</li> </ul>	
100 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・腎尿細管好塩基性変化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・腎尿細管好塩基性変化</li> </ul>
30 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし

17

## 18 13. 生殖発生毒性試験

## 19 (1) 2 世代繁殖試験（ラット）

20 SD ラット（一群雌雄各 28 匹）を用いた混餌（原体：0、100、700 及び 4,900 ppm）  
21 投与による 2 世代繁殖試験が実施された。各世代とも 2 回ずつ交配、出産させ、2

1 回目の産児を次世代の親動物とした。  
 2 親動物及び児動物における各投与群で認められた毒性所見はそれぞれ表 19 に示  
 3 されている。  
 4 また、F<sub>1a</sub> 及び F<sub>2b</sub> 児動物は、それぞれ離乳 13 及び 16 週後まで検体を投与した  
 5 ところ、4,900 ppm 投与群の雌雄で肝及び腎補正重量<sup>3</sup>増加、雌で脾、心及び下垂体  
 6 補正重量増加が、700 ppm 以上投与群の雌雄で着色尿、雌で腎絶対重量増加が認め  
 7 られた。  
 8 本試験において、親動物では 4,900 ppm 投与群の雄で肝及び腎補正重量増加等が、  
 9 700 ppm 以上投与群の雌で腎集合管嚢胞等が、児動物では 700 ppm 以上投与群で  
 10 肝補正重量増加が認められたので、無毒性量は親動物では雄で 700 ppm (P 雄：49.9  
 11 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雄：58.3 mg/kg 体重/日)、雌で 100 ppm (P 雌：8.1 mg/kg 体  
 12 重/日、F<sub>1</sub> 雌：9.1 mg/kg 体重/日)、児動物では 100 ppm (P 雄：7.1 mg/kg 体重/  
 13 日、P 雌：8.1 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雄：8.4 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雌：9.1 mg/kg 体重/  
 14 日) であると考えられた。繁殖能に対する影響は認められなかった。(参照 8、9)  
 15  
 16

表 19 2 世代繁殖試験（ラット）で認められた毒性所見

	投与群	親 P、児：F <sub>1a</sub> ・F <sub>1b</sub>		親：F <sub>1b</sub> 、児：F <sub>2a</sub> ・F <sub>2b</sub>	
		雄	雌	雄	雌
親動物	4,900 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>肝及び腎補正重量増加</li> <li>甲状腺絶対重量増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>肝補正重量増加</li> <li>甲状腺絶対重量増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>着色尿</li> <li>飲水量増加傾向</li> <li>肝及び腎補正重量増加</li> <li>甲状腺絶対重量増加</li> <li>腎集合管嚢胞</li> <li>腎髄質巣状線維化、うっ血、炎症細胞、鉍質沈着、出血</li> <li>腎尿細管好塩基性変化</li> <li>小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>甲状腺ろ胞上皮細胞高増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>着色尿</li> <li>飲水量増加傾向</li> <li>肝及び腎補正重量増加</li> <li>腎肥大</li> <li>腎髄質巣状線維化、うっ血、炎症細胞、出血</li> <li>腎尿細管好塩基性変化</li> <li>小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>甲状腺ろ胞上皮細胞高増加</li> </ul>
	700 ppm 以上	700 ppm 以下 毒性所見なし	700 ppm 以下 毒性所見なし	700 ppm 以下 毒性所見なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>腎集合管嚢胞及び拡張</li> <li>腎皮髄境界部鉍質沈着</li> </ul>
	100 ppm				毒性所見なし

<sup>3</sup> 最終体重を共変数として共分散分析した臓器重量（以下、同じ）。

児動物	4,900 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生後 12～21 日死亡数増加傾向</li> <li>・振戦、腹部膨満、異常歩行</li> <li>・低体重</li> <li>・肝絶対重量増加</li> <li>・腎絶対及び補正重量増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・振戦、腹部膨満、異常歩行</li> <li>・低体重</li> <li>・肝絶対重量増加</li> <li>・腎絶対及び補正重量増加</li> </ul>
	700 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・肝補正重量増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・肝補正重量増加</li> </ul>
	100 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし

1

2 (2) 発生毒性試験（ラット）

3 SD ラット[一群雌 35 匹：親動物 (P)] の妊娠 6～17 日に強制経口（原体：0、12.5、  
4 250 及び 5,000 mg/kg 体重/日、溶媒：1%MC 水溶液）投与し、発生毒性試験が実  
5 施された。出産後、児動物 (F<sub>1</sub>：P の各群各腹雌雄 1 匹ずつ) は検体無投与で飼育  
6 し、12 週齢で交配、出産させた（児動物 F<sub>2</sub>）。

7 母動物 (P) では、5,000 mg/kg 体重/日投与群で流涎、口周辺部の赤褐色の着色、  
8 軽微な体重増加抑制並びに皮膚の病変（痂皮、着色及び脱毛）が認められた。

9 胎児・児動物 (F<sub>1</sub> 及び F<sub>2</sub>) では、検体投与の影響は認められなかった。

10 本試験における無毒性量は、母動物で 250 mg/kg 体重/日、胎児・児動物で本試  
11 験の最高用量 5,000 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかつ  
12 た。（参照 8、9）

13

14 (3) 発生毒性試験（ウサギ）

15 NZW ウサギ（一群雌 16～17 匹）の妊娠 6～18 日に強制経口（原体：0、10、50  
16 及び 250 mg/kg 体重/日、溶媒：1%MC 水溶液）投与し、発生毒性試験が実施され  
17 た。

18 母動物では、250 mg/kg 体重/日投与群で摂餌量減少、流産（2 例）が、早期胚死  
19 亡増加傾向が、50 mg/kg 体重/日以上投与群で体重増加抑制が認められた。

20 胎児では、250 mg/kg 体重/日投与群で早期胚死亡増加傾向が認められた。検体投  
21 与の影響は認められなかった。

22 本試験における無毒性量は母動物で 10 mg/kg 体重/日、胎児で 50 mg/kg 体重/日  
23 本試験の最高用量 250 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められな  
24 かった。（参照 8、9）

**【納屋委員より】**

胎児の無毒性量は50 mg/kg体重/日と考えます。

250 mg/kg 体重/日投与群で早期胚死亡増加傾向が認められたと記載されています。  
これを母動物に対する影響と判断されたのでしょうが、この所見は胎児に対する影響  
と判断すべきです。

25

1 14. 遺伝毒性試験

2 エトフェンプロックスの細菌を用いた DNA 修復試験及び復帰突然変異試験、チ  
 3 ャイニーズハムスターV79 細胞を用いた遺伝子突然変異試験、チャイニーズハムス  
 4 ター肺由来培養細胞 (CHL) 及びヒトリンパ腫細胞を用いた *in vitro* 染色体異常試  
 5 験、ヒト HeLa 細胞を用いた *in vitro* 不定期 DNA 合成 (UDS) 試験及びマウスを  
 6 用いた *in vivo* 小核試験が実施された。

7 結果は表 20 に示されており、結果がすべて陰性であったことから、エトフェン  
 8 プロックスに遺伝毒性はないものと考えられた。(参照 8、9)

9

10

表 20 遺伝毒性試験概要 (原体)

試験	対象	処理濃度・投与量	結果	
<i>in vitro</i>	DNA 修復試験	<i>Bacillus subtilis</i> (H17、M45 株)	100~20,000 µg/ディスク(+/-S9)	陰性
	復帰突然変異試験	<i>Salmonella typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、TA1537、TA1538 株) <i>Escherichia coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株)	10~5,000 µg/プレート(+/-S9)	陰性
	遺伝子突然変異試験	チャイニーズハムスター V79 細胞 (HGPRT 遺伝子座)	9.75~156 µg/mL	陰性
	染色体異常試験	チャイニーズハムスター肺由来細胞(CHL)	0.38~124 µg/mL (+/-S9)	陰性
		ヒトリンパ腫細胞	12.5~50 µg/mL (+/-S9)	陰性
UDS 試験	ヒト HeLa 細胞	2.44~39 µg/mL (+S9) 9.75~156 µg/mL (-S9)	陰性	
<i>in vivo</i>	小核試験	ICR マウス (骨髄細胞) (一群雌雄各 5 匹)	80、400、2,000 mg/kg 体重 (単回経口投与、24 時間後採取) 2,000 mg/kg 体重 (単回経口投与、48 及び 72 時間後採取)	陰性

11 注) +/-S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

12

13 代謝物 II 及びIVについて、細菌を用いた DNA 修復試験及び復帰突然変異試験が  
 14 実施された。

15 試験結果は表 21 に示されている通りすべて陰性であった。(参照 8)

16

1 表 21 遺伝毒性試験概要（代謝物）

被験物質	試験	対象	処理濃度・投与量	結果
II	DNA 修復試験	<i>B. subtilis</i> (H17、M45 株)	①39.1～10,000 µg/テ <sup>イ</sup> イスク(+S9) 78.1～20,000 µg/テ <sup>イ</sup> イスク(-S9) ②15.6～4,000 µg/テ <sup>イ</sup> イスク(+S9) 1.0～16.0 µg/テ <sup>イ</sup> イスク(-S9)	陰性
	復帰突然変異試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、 TA1537、TA1538 株) <i>E. coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株)	1,250～40,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性
IV	DNA 修復試験	<i>E. coli</i> (WP-2、WP-67、CM-871 株)	320～10,000 µg/mL (+/-S9) (2、18 時間暴露)	陰性
	復帰突然変異試験	<i>S. typhimurium</i> (TA97a、TA98、TA100、 TA102、TA1535、 TA1537 株) <i>E. coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株)	50～5,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性

2

## 3 15. その他の試験：甲状腺腫瘍発生メカニズム試験（ラット）

4 ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験[12. (2)]において、4,900 ppm  
5 投与群の雌で甲状腺ろ胞細胞腺腫の発生頻度増加が認められたため、エトフェン  
6 プロックスと甲状腺腺腫との因果関係を明らかにするために、SD ラット（一群雌雄  
7 各 20 匹）に、エトフェンプロックスを 14 または 28 日間<sup>4</sup>混餌（原体：0、1,250、  
8 5,000 及び 20,000 ppm）投与する試験が実施された。

9 20,000 ppm 投与群の雄及び 5,000 ppm 以上投与群の雌で体重増加抑制が、5,000  
10 ppm 以上投与群の雌で摂餌量減少が認められた。

11 TSH は、20,000 または 5,000 ppm 投与群の雌雄で増加したが、回復期間を置  
12 いた群では、対照群との差は認められず、投与中止によって回復することが示唆され  
13 た。

14 T<sub>4</sub>は、20,000 ppm で 14 日間投与した雄で減少したが、14 日間投与群の雌、28  
15 日間投与群及び回復期間を置いた群の雌雄では、いずれも対照群と差は認められな  
16 かった。T<sub>3</sub>に検体投与の影響は認められなかった。

17 臓器重量に関しては、20,000 ppm 投与群の雌及び 1,250 ppm 以上投与群の雄で  
18 肝絶対重量、または肝比重量増加が認められたが、回復期間を置いた群では、対照  
19 群と差は認められなかった。

20 病理組織学的検査において、20,000 ppm 投与群の雌雄で、小葉中心性肝細胞肥  
21 大及び多核肝細胞増加が認められた。回復期間を置いた群でも、雌の一部で多核肝

<sup>4</sup> i) 14 日間または ii) 28 日間混餌投与群、 iii) 14 日間混餌投与後 14 日間回復期間を置いた群、  
iv) 28 日間混餌投与後 28 日間回復期間を置いた群、の 4 群を設けた

1 細胞増加及び小葉中心性肝細胞肥大が認められた。

2 肝ミクロソーム画分の分析において、20,000 ppm で4日間投与した雌雄及び  
3 5,000 ppm で14日間投与した雄でUDPGT活性上昇が認められた。しかし、28日  
4 間投与群の雌ではUDPGT活性上昇は認められなかった。

5 甲状腺ペルオキシダーゼの分析において、28日間投与した全投与群の雌雄で、ペ  
6 ルオキシダーゼ活性低下が認められたが、この所見と甲状腺ホルモンとの関連は明  
7 らかではなかった。

8 甲状腺のBrdU免疫染色による細胞増殖活性を測定したところ、20,000 ppm 投  
9 与群の雄で軽微な細胞増殖増加が認められたが、対照群との有意差は認められな  
10 かった。

11 以上より、エトフェンプロックス投与により、TSH増加、 $T_4$ 減少、肝重量増加、  
12 UDPGT活性上昇及び小葉中心性肝細胞肥大が生じることが示された。したがって、  
13 ラットの雌で認められた甲状腺ろ胞細胞腺腫の増加の機序として、肝臓の第二相酵  
14 素であるUDPGT活性が誘導され血中 $T_4$ が減少した結果、TSHが増加したことに  
15 起因する可能性が示唆された。(参照8)

16

差し替え

### III. 食品健康影響評価

参照に挙げた資料を用いて、農薬「エトフェンプロックス」の食品健康影響評価を実施した。

ラットにおける動物体内運命試験の結果、エトフェンプロックスは、投与 3～5 時間後に  $C_{max}$  に達した。用量の違いによる  $C_{max}$  及び AUC の変化、排泄率から計算された吸収率のデータ等から、吸収に非線形性が認められ、低用量でより高い吸収率が得られるものと考えられた。投与後 120 時間で 94.4～98.8%TAR が尿及び糞中に排泄され、主要排泄経路は糞中であつた。体内では、脂肪、副腎、膵臓等に比較的多く分布し、脂肪からの減衰は、他の組織よりやや遅かつた。また、妊娠ラットに経口投与されたエトフェンプロックスは、乳汁中に移行することが確認された。糞及び組織中の主要成分は親化合物であつたが、尿及び胆汁中に親化合物は存在しなかつた。主要代謝物はⅡ及びⅢであつた。また代謝物Ⅳの生成も認められた。

イヌ及びマウスにおける動物体内運命試験の結果、主要排泄経路は糞中であり、主要代謝経路にラットとの大きな差は認められなかつた。

植物体内運命試験の結果、植物体内での主要成分は、親化合物及び代謝物Ⅳであつた。Ⅳは最大 14.7%TAR（塗布処理されたさやいんげんの葉）検出されたが、通常行なわれる散布処理では 6.0%TRR を超えなかつた。可食部では 10%TRR を超えなかつた。

エトフェンプロックス及び代謝物Ⅳを分析対象化合物として作物残留試験が実施された。エトフェンプロックスの最高値は、最終散布 14 日後に収穫したみかん（果皮）の 11.4 mg/kg、代謝物Ⅳの最高値は、最終散布 28 日後に収穫した夏みかん（果皮）の 1.15 mg/kg であつた。また、魚介類におけるエトフェンプロックスの最大推定残留値は、0.713 mg/kg であつた。

各種毒性試験結果から、エトフェンプロックス投与による影響は、主に肝臓、腎臓、甲状腺及び血液に認められた。神経毒性、繁殖能に対する影響、催奇形性及び遺伝毒性は認められなかつた。

発がん性試験において、ラットの雌で甲状腺ろ胞細胞腺腫が認められたが、遺伝毒性試験がすべて陰性であつたこと及びメカニズム試験の結果より、腫瘍の発生機序は遺伝毒性メカニズムとは考え難く、評価にあたり閾値を設定することは可能であると考えられた。

代謝物Ⅳのラットを用いた 90 日間亜急性毒性試験の結果、Ⅳの毒性はエトフェンプロックスに比べ非常に弱かつた。

各種試験結果から、食品中の暴露評価対象物質をエトフェンプロックス（親化合物のみ）と設定した。

【事務局より】

作物残留試験では、分析対象を親化合物+代謝物IVとしており、IVの残留が認められています。

一方、暴露評価対象物質は「親化合物のみ」としているため、その理由が必要だと思われます。網掛け部分を追記しましたが、内容及びさらに追加すべき事項があればご検討をお願いします。

【上路委員より】

一部、修正しました。また、代謝物の残留割合については、TAR%か、TRR%か、確認する必要がある。

【事務局より】

抄録中の記載は、各作物で以下のとおりでした。

    水稻：TAR%及びTRR%で算出されたデータあり。

    いんげん：TAR%、

    ぶどう：TRR%、なたね：TRR%、レタス：TRR%

- 1 各試験の無毒性量等は表 22 に示されている。  
 2 食品安全委員会農薬専門調査会は、各試験で得られた無毒性量の最小値が、マウス  
 3 を用いた 2 年間発がん性試験の 3.1 mg/kg 体重/日であったので、これを根拠として安  
 4 全係数 100 で除した 0.031 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量（ADI）と設定した。

5

ADI	0.031 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料)	発がん性試験
(動物種)	マウス
(期間)	2 年間
(投与方法)	混餌
(無毒性量)	3.1 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

6

- 7 暴露量については、暫定基準値の見直しを行う際に確認することとする。

1

表 22 各試験における無毒性量

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量(mg/kg 体重/日) <sup>1)</sup>	
			農薬抄録	JMPR
ラット	90日間 亜急性 毒性試験 ①	0、50、300、1,800、 10,800 ppm ----- 雄：0、3.3、20、 120、734 雌：0、3.8、23、 142、820	雄：20 雌：142  雄：AST、ALT及びT.Chol 増加等 雌：体重増加抑制等	雄：20 雌：23  雌雄：体重増加抑制等
	90日間 亜急性 毒性試験 ②	0、50、300、1,800、 10,800 ppm ----- 雄：0、3.7、22.7、 136、970 雌：0、3.9、23.5、 143、819	雄：22.7 雌：23.5  雄：体重増加抑制等 雌：T <sub>3</sub> 及びT <sub>4</sub> 増加等	
	90日間 亜急性 神経毒性 試験	0、2,500、5,000、 10,000 ppm ----- 雄：0、149、299、 604 雌：0、174、350、 690	雄：— 雌：350  雄：肝比重量増加 雌：肝絶対及び比重量増加  (神経毒性は認められない)	
	2年間 慢性毒性 /発がん 性併合 試験	0、30、100、700、 4,900 ppm ----- 雄：0、1.1、3.7、 25.5、187 雌：0、1.4、4.8、 34.3、249	雄：3.7 雌：34.3  雄：変異肝細胞巣(好酸性/ 空胞)等 雌：体重増加抑制等  (雌で甲状腺ろ胞細胞 腺腫)	雄：3.7 雌：4.8  雌雄：摂餌量減少、甲状腺 重量増加等  (雌で甲状腺腫瘍)
	2世代 繁殖試験	0、100、700、 4,900 ppm ----- P雄：0、7.1、49.9、 347 P雌：0、8.1、57.5、 420 F <sub>1</sub> 雄：0、8.4、58.3、 430 F <sub>2</sub> 雌：0、9.1、64.4、 450	親動物 P雄：49.9 F <sub>1</sub> 雄：58.3 P雌：8.1 F <sub>1</sub> 雌：9.1  児動物 P雄：7.1 F <sub>1</sub> 雄：8.4 P雌：8.1 F <sub>1</sub> 雌：9.1  親動物 雄：肝及び腎補正重量増加 等 雌：腎集合管囊胞等  児動物：肝補正重量増加	親動物 P雄：49.9 F <sub>1</sub> 雄：58.3 P雌：8.1 F <sub>1</sub> 雌：9.1  児動物 P雄：7.1 F <sub>1</sub> 雄：8.4 P雌：8.1 F <sub>1</sub> 雌：9.1  親動物 雄：肝及び腎補正重量増加 等 雌：腎集合管囊胞等  児動物：肝補正重量増加

			(繁殖能に対する影響は認められない)	(繁殖能に対する影響は認められない)
	発生毒性試験	0、12.5、250、5,000	母動物：250 胎児：5,000  母動物：流涎、口周辺部の赤褐色の着色等 胎児：毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物：250 胎児：5,000  母動物：流涎、口周辺部の赤褐色の着色 胎児：毒性所見なし (催奇形性は認められない)
マウス	90日間 亜急性 毒性試験	0、50、500、3,000、 15,000 ppm 雄：0、6.1、60、 375、1,980 雌：0、6.9、71、 390、2,190	雄：375 雌：390  雌雄：体重増加抑制等	雄：60 雌：71  雌雄：臨床症状、死亡率増加等
	2年間 発がん性 試験	0、30、100、700、 4,900 ppm 雄：0、3.1、10.4、 75.2、547 雌：0、3.6、11.7、 80.9、616	雄：3.1 雌：3.6  雌雄：腎尿細管好塩基性変化 (発がん性は認められない)	雄：3.1 雌：3.6  雌雄：腎尿細管好塩基性変化 (発がん性は認められない)
ウサギ	発生毒性試験	0、10、50、250	母動物：10 胎児： <del>50</del> 250  親動物：体重増加抑制 胎児：早期胚死亡増加傾向 毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物：10 胎児：250  親動物：体重増加抑制 胎児：毒性所見なし (催奇形性は認められない)
イヌ	1年間 慢性毒性 試験	0、100、1,000、 10,000 ppm 雄：0、3.46、33.4、 352 雌：0、3.17、32.2、 339	雄：33.4 雌：32.2  雌雄：TP及びAlb減少、 ALP増加等	雄：33.4 雌：32.2  雌雄：TP及びAlb減少、 ALP増加等
ADI			NOAEL：3.1 SF：100 ADI：0.031	NOAEL：3.1 SF：100 ADI：0.03
ADI設定根拠資料			マウス2年間発がん性試験	マウス2年間発がん性試験

- 1 注) NOAEL：無毒性量 SF：安全係数 ADI：一日摂取許容量  
2 1)：最小毒性量で認められた毒性所見を記した。  
3 -：無毒性量は設定できなかった。

## 1 &lt;別紙1:代謝物/分解物等略称&gt;

記号	略称	化学名
II	脱エチル体 (DE)	2-(4-ヒドロキシフェニル)-2-メチルプロピル 3-フェノキシベンジル エーテル
III	水酸化体 (4' OH)	2-(4-エトキシフェニル)-2-メチルプロピル 3-(4-ヒドロキシフェノキシ)ベンジル エーテル
IV	酸化体-1 ( $\alpha$ -CO)	2-(4-エトキシフェニル)-2-メチルプロピル 3-フェノキシベンゾエート
V	脱フェニル体 (DP)	2-(4-エトキシフェニル)-2-メチルプロピル 3-ヒドロキシベンジル エーテル
VII	— (m-PB-alc)	3-フェノキシベンジルアルコール
VIII	— (m-PB-acid)	3-フェノキシ安息香酸
IX	— (PENA)	2-(4-エトキシフェニル)-2-メチルプロパン-1-オール
X	— (OH-Palc)	2-(4-ヒドロキシフェニル)-2-メチルプロパン-1-オール
X I	— (EPMP)	2-(4-エトキシフェニル)-2-メチルプロピオン酸
X II	(4'-OH PBacid)	3-(4-ヒドロキシフェノキシ)安息香酸

2

## 1 &lt;別紙2：検査値等略称&gt;

略称	名称
ACh	アセチルコリン
ai	有効成分量
Alb	アルブミン
ALP	アルカリホスファターゼ
ALT	アラニンアミノトランスフェラーゼ [=グルタミン酸ピルビン酸トランスアミナーゼ (GPT) ]
APTT	活性化部分トロンボプラスチン時間
AST	アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ [=グルタミン酸オキサロ酢酸トランスアミナーゼ (GOT) ]
AUC	薬物濃度曲線下面積
BCF	生物濃縮係数
BUN	血液尿素窒素
C <sub>max</sub>	最高濃度
DMF	<i>N,N</i> -ジメチルホルムアミド
FOB	機能観察総合検査
Glob	グロブリン
Glu	グルコース(血糖)
Hb	ヘモグロビン量 (血色素量)
Ht	ヘマトクリット値
LC <sub>50</sub>	半数致死濃度
LD <sub>50</sub>	半数致死量
LDH	乳酸脱水素酵素
Lym	リンパ球
MC	メチルセルロース
MCHC	平均赤血球血色素濃度
MCV	平均赤血球容積
Neu	好中球
PCV	血中血球容積
PEC	環境中予測濃度
PHI	最終使用から収穫までの日数
PT	プロトロンビン時間
RBC	赤血球数
T <sub>1/2</sub>	消失半減期
T <sub>3</sub>	トリヨードサイロニン

T <sub>4</sub>	サイロキシン
TAR	総投与（処理）放射能
T.Chol	総コレステロール
T <sub>max</sub>	最高濃度到達時間
TP	総蛋白質
TRR	総残留放射能
TSH	甲状腺刺激ホルモン
UDGPT	ウリジン二リン酸グルクロニルトランスフェラーゼ
WBC	白血球数

1 <別紙3: 作物残留試験成績>

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
水稻① (玄米) 1984年度	1	1.4 <sup>WP</sup> /箱 + 900 <sup>G</sup>	2	114	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			98	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
水稻② (玄米) 1987年度	1	100 <sup>WP</sup>	1	37	<0.01	<0.01	0.005	0.005		
	1			37	<0.01	<0.01	0.005	0.005		
水稻③ (玄米) 1987年度	1	100 <sup>WP</sup>	1	37	<0.01	<0.01	0.005	0.005		
	1			37	<0.01	<0.01	0.005	0.005		
水稻④ (玄米) 1988年度	1	200 <sup>EC</sup> ×3	3	14	0.07	0.06	0.107	0.106		
				21	0.05	0.04	0.068	0.068		
				28	0.03	0.03	0.042	0.042		
	1			14	0.03	0.02	0.037	0.036		
				21	0.04	0.04	0.065	0.064		
				28	0.02	0.02	0.017	0.016		
水稻⑤ (玄米) 1988年度	1	200 <sup>OS</sup>	3	43	<0.01	<0.01	<0.04	<0.04		
	1			42	<0.01	<0.01	<0.04	<0.04		
水稻⑥ (玄米) 1989年度	1	400 <sup>EC</sup> ×3	3	21	<0.01	<0.01	0.06	0.06		
				28	<0.01	<0.01	0.03	0.03		
	1			21	0.03	0.03	0.04	0.04		
				28	0.03	0.03	0.03	0.02		
水稻⑦ (玄米) 1989年度	1	300 <sup>OS</sup> ×3	3	21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01		
	1			21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01		
水稻⑧ (玄米) 1990年度	1	1,000 <sup>EC</sup> ×3	3	21			0.010	0.010		
	1			23			0.016	0.015		
水稻⑨ (玄米) 1991年度	1	300 <sup>SC</sup> ×3	3	14	0.03	0.02	0.023	0.023		
				21	0.02	0.02	0.015	0.014		
				28	0.01	0.01	0.006	0.006		
	1			14	0.03	0.03	0.025	0.024		
				21	0.01	0.01	0.010	0.010		
				28	0.01	0.01	0.006	0.006		
水稻⑩ (玄米) 1993年度	1	125 <sup>EC</sup> ×3	3	21			0.022	0.022		
	1			21			0.020	0.020		
水稻⑪ (玄米) 1993年度	1	300 <sup>MC</sup> ×3	3	21	0.05	0.04	0.048	0.046		
				28	0.03	0.03	0.030	0.030		
	1			21	0.03	0.02	0.019	0.019		
				28	<0.01	<0.01	0.007	0.006		
水稻⑫ (玄米) 1994年度	1	250 <sup>EC</sup> ×3	3	21			0.046	0.046		
	1			21			0.015	0.015		
	1			21			0.068	0.065		
	1			21			0.024	0.022		

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
水稲⑬ (玄米) 1994年度	1	97.5~ 100 <sup>MC</sup>	1	22	<0.01	<0.01	0.007	0.007		
	1			27	<0.01	<0.01	0.006	0.005		
	1	100 <sup>MC</sup>	1	22	<0.01	<0.01	0.011	0.010		
	1			27	<0.01	<0.01	0.020	0.018		
水稲⑭ (玄米) 1995年度	1	129 <sup>WP</sup> ×3	3	21			0.018	0.016		
	1			21			0.010	0.009		
	1			21			0.012	0.011		
	1			21			0.017	0.016		
水稲⑮ (玄米) 1995年度	1	200 <sup>DL</sup> ×3	3	7	<0.01	<0.01	0.007	0.006		
	1			14	<0.01	<0.01	0.006	0.006		
	1			7	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
				14	<0.01	<0.01	0.004	0.004		
水稲⑯ (玄米) 1998年度	1	100 <sup>MC</sup>	1	27			<0.01	<0.01		
	1			28			<0.01	<0.01		
	1			27			<0.01	<0.01		
	1			28			<0.01	<0.01		
水稲⑰ (玄米) 1998年度	1	167 <sup>MC</sup> ×3	3	21			0.01	0.01		
	1			21			<0.01	<0.01		
	1			21			0.02	0.02		
	1			21			0.04	0.04		
水稲⑱ (玄米) 2000年度	1	100 <sup>MC</sup> ×3	3	21	0.02	0.02	0.02	0.02		
	1			21	0.01	0.01	0.02	0.02		
水稲⑲ (玄米) 2003、2004年度	1	100 <sup>EC</sup> ×3	3	21	<0.01	<0.01	0.01	0.01		
	1			28	<0.01	<0.01	0.01	0.01		
	1			21	<0.01	<0.01	0.01	0.01		
				28	0.01	0.01	0.01	0.01		
水稲① (稲わら) 1984年度	1	1.4 <sup>WP</sup> /箱 + 900 <sup>G</sup>	2	114	0.39	0.39	0.48	0.48	0.08	0.08
	1			98	0.02	0.02	0.04	0.04	<0.01	<0.01
水稲② (稲わら) 1987年度	1	100 <sup>WP</sup>	1	37	0.46	0.44	0.30	0.29		
	1			37	0.36	0.34	0.49	0.48		
水稲③ (稲わら) 1987年度	1	100 <sup>WP</sup>	1	37	0.37	0.36	0.33	0.32		
	1			37	0.60	0.60	0.62	0.60		
水稲④ (稲わら) 1988年度	1	200 <sup>EC</sup> ×3	3	14	3.08	3.00	2.94	2.90		
				21	2.48	2.36	1.39	1.38		
				28	0.83	0.82	0.98	0.96		
	1			14	7.20	7.11	5.87	5.83		
				21	5.77	5.51	3.97	3.96		
				28	1.86	1.82	2.36	2.35		
水稲⑤ (稲わら) 1988年度	1	200 <sup>OS</sup>	3	43	0.07	0.06	0.09	0.08		
	1			42	0.06	0.06	3.60	3.56		

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
水稲⑥ (稲わら) 1989年度	1	400 <sup>EC</sup> ×3	3	21	3.42	3.34	5.96	5.85		
				28	1.62	1.61	2.56	2.50		
	1			21	3.93	3.92	4.09	4.06		
				28	2.31	2.22	2.76	2.76		
水稲⑦ (稲わら) 1989年度	1	300 <sup>OS</sup> ×3	3	21	0.37	0.36				
	1			21	1.35	1.33				
水稲⑨ (稲わら) 1991年度	1	300 <sup>SC</sup> ×3	3	14	1.52	1.48	2.89	2.86		
				21	1.11	1.06	1.02	0.98		
				28	1.09	1.06	0.60	0.60		
	1			14	3.94	3.91	2.72	2.68		
				21	1.79	1.73	1.68	1.66		
				28	1.25	1.20	0.81	0.80		
水稲⑩ (稲わら) 1993年度	1	125 <sup>EC</sup> ×3	3	21			1.90	1.82		
	1			21			4.56	4.31		
水稲⑪ (稲わら) 1993年度	1	300 <sup>MC</sup> ×3	3	21	6.22	5.99	7.13	7.06		
				28	4.71	4.61	4.88	4.78		
	1			21	2.60	2.55	5.03	4.96		
				28	1.05	1.02	1.73	1.64		
水稲⑫ (稲わら) 1994年度	1	250 <sup>EC</sup> ×3	3	21			3.41	3.18		
	1			21			2.86	2.86		
	1			21			5.20	5.06		
	1			21			2.88	2.64		
水稲⑬ (稲わら) 1994年度	1	97.5~ 100 <sup>MC</sup>	1	22	0.77	0.76	1.07	1.05		
	1			27	0.22	0.21	0.50	0.47		
	1	100 <sup>MC</sup>	1	22	0.74	0.72	1.90	1.76		
				27	0.91	0.90	1.56	1.38		
水稲⑭ (稲わら) 1995年度	1	129 <sup>WP</sup> ×3	3	21			2.66	2.56		
	1			21			1.97	1.96		
	1			21			1.53	1.50		
	1			21			3.39	3.34		
水稲⑮ (稲わら) 1995年度	1	200 <sup>DL</sup> ×3	3	7	3.02	2.98	2.77	2.68		
				14	1.62	1.62	3.93	3.83		
	1			7	1.58	1.58	1.60	1.58		
				14	3.02	3.00	1.78	1.76		
水稲⑯ (稲わら) 1998年度	1	100 <sup>MC</sup>	1	27			0.94	0.93		
	1			28			0.67	0.65		
	1			27			0.58	0.57		
	1			28			1.00	0.98		
水稲⑰ (稲わら) 1998年度	1	167 <sup>MC</sup> ×3	3	21			2.27	2.22		
	1			21			2.38	2.28		
	1			21			2.40	2.34		
	1			21			4.34	4.22		

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
水稻⑧ (稲わら) 2000年度	1	100 <sup>MC</sup> ×3	3	21	5.00	4.98	5.05	4.96		
	1			21	1.96	1.94	1.76	1.72		
水稻⑨ (稲わら) 2003,2004 年度	1	100 <sup>EC</sup> ×3	3	21	2.28	2.20	1.17	1.16		
	1			28	3.66	3.58	4.46	4.46		
				21	4.1	4.0	4.6	4.4		
				28	3.6	3.4	3.4	3.4		
小麦 (玄麦) 1987年度	1	200 <sup>EC</sup> ×2	2	14	0.01	0.01	0.023	0.022		
	1			21	<0.01	<0.01	0.006	0.006		
				28	<0.01	<0.01	0.005	0.005		
				21	0.06	0.06	0.058	0.058		
小麦 (玄麦) 2005年度	1	100 <sup>MC</sup> ×2	2	14	0.02	0.02	0.03	0.03		
	1			21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01		
				30	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01		
				14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01		
とうもろこし (未成熟子実) 1984年度	1	500 <sup>EC</sup> ×4	2	7	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				7	0.06	0.06	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
とうもろこし (未成熟子実) 1984年度	1	500 <sup>EC</sup> ×4	2	7	<0.01	<0.01	0.02	0.02	<0.01	<0.01
	1			14	<0.01	<0.01	0.04	0.04	<0.01	<0.01
				7	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
だいず (乾燥子実) 1983,1984年度	1	300 <sup>EC</sup> ×2	2	14	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
だいず (乾燥子実) 1992年度	1	205~ 260 <sup>EC</sup> ×2	2	14	<0.01	<0.01	0.005	0.005		
	1			15	0.03	0.03	0.035	0.034		
だいず (乾燥子実) 1994年度	1	100 <sup>EC</sup> ×2	2	14			<0.004	<0.004		
	1			14			<0.004	<0.004		
だいず (乾燥子実) 1994年度	1	300 <sup>MC</sup> ×2	2	14	<0.01	<0.01	0.015	0.014		
だいず (乾燥子実) 1995年度	1	300 <sup>MC</sup> ×2	2	14	0.006	0.006	0.007	0.006		
	1			14	0.062	0.060	0.028	0.025		
だいず (乾燥子実) 1997年度	1	300 <sup>MC</sup> ×2	2	14 21			0.013 0.009	0.012 0.008		

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
だいず (乾燥子実) 1997年度	1	300 <sup>EC</sup> ×2	2	14 21	/	/	0.016 0.006	0.014 0.006	/	/
だいず (乾燥子実) 1998年度	1	400 <sup>MC</sup> ×2	2	14	0.02	0.02	0.01	0.01	/	/
	21			<0.01	<0.01	<0.01	<0.01			
だいず (乾燥子実) 1998年度	1	200 <sup>MC</sup> ×2	2	14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	/	/
	21			<0.01	<0.01	<0.01	<0.01			
だいず (乾燥子実) 1998年度	1	200 <sup>MC</sup> ×2	2	14	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	/	/
	21			<0.02	<0.02	<0.02	<0.02			
あずき (乾燥子実) 1996年度	1	180~ 200 <sup>EC</sup>	1	14	/	/	0.004	0.004	/	/
	1			14	/	/	0.004	0.004		
あずき (乾燥子実) 1996年度	1	238~ 250 <sup>EC</sup>	1	14	/	/	0.004	0.004	/	/
	1			14	/	/	0.004	0.004		
らっかせい (子実) 2004年度	1	313~ 400 <sup>EC</sup> ×3	3	14	/	/	0.01	0.01	/	/
	21			/	/	<0.01	<0.01			
ばれいしょ (塊茎) 1987年度	1	300~ 600 <sup>EC</sup> ×3	3	14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	/	/
	1			14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01		
ばれいしょ (塊茎) 2001年度	1	400~ 600 <sup>MC</sup> ×3	3	7	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			7	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
さといも (塊茎) 1992年度	1	500 <sup>EC</sup> ×3	3	14	<0.005	<0.005	0.004	0.004	/	/
	1			14	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004		
みずいも (塊茎) 2004年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	14	<0.005	<0.005	/	/	/	/
				21	<0.005	<0.005				
				28	<0.005	<0.005				
	1			14	0.007	0.007				
かんしょ (塊根) 1990年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	7	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004	/	/
				14	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
				21	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
	1			7	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
	14			<0.01	<0.01	<0.004	<0.004			
21	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004						

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
やまいも (塊茎) 1989年度	1	200 <sup>DL</sup> ×2	2	23	<0.03	<0.03				
やまいも (塊茎) 1992年度	1	500~ 700 <sup>EC</sup> ×3	3	14	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004		
	1			14	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004		
やまいも (塊茎) 1997年度	1	400 <sup>EC</sup>	1	22			<0.005	<0.005		
	1			14			<0.005	<0.005		
	1			21			<0.005	<0.005		
やまいも (塊茎) 1997年度	1	700 <sup>EC</sup>	1	22			<0.005	<0.005		
	1			14			<0.005	<0.005		
	1			21			<0.005	<0.005		
てんさい (根部) 1984年度	1	300 <sup>EC</sup>	3	14	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
				21	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
				28	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
	1			14	0.04	0.04	0.10	0.10	<0.01	<0.01
				21	0.03	0.03	0.08	0.08	<0.01	<0.01
				28	0.04	0.04	0.03	0.03	<0.01	<0.01
てんさい (根部) 2000年度	1	300~ 400 <sup>MC</sup> ×3	3	14	0.04	0.04	0.038	0.036		
				21	0.08	0.08	0.076	0.076		
	1			14	0.02	0.02	0.037	0.036		
				21	0.07	0.06	0.029	0.028		
てんさい (根部) 2000年度	1	400 <sup>MC</sup> ×3	3	14	0.05	0.05	0.054	0.051		
				21	0.02	0.02	0.020	0.019		
	1			14	<0.01	<0.01	0.007	0.006		
				21	0.01	0.01	0.011	0.010		
さとうきび (茎) 1992年度	1	1,350 <sup>G</sup> ×3	3 <sup>a</sup>	45	<0.005	<0.005	0.005	0.005	<0.01	<0.01
	1			45	<0.005	<0.005	0.009	0.007	<0.01	<0.01
だいこん (根部) 1983年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			21	0.02	0.02	0.02	0.02	0.04	0.04
だいこん (根部) 1986年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	21	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02
				30	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			23	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				28	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
だいこん (根部) 1987年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	21	<0.01	<0.01	<0.005	<0.005		
				30	0.01	0.01	<0.005	<0.005		
	1			21	0.03	0.03	0.043	0.042		
				30	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01		
だいこん (根部) 2004年度	1	300~ 360 <sup>MC</sup> ×3	3	21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01		
だいこん (葉部) 1983年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	21	0.48	0.46	0.54	0.54	0.14	0.14
	1			21	4.16	4.09	2.44	2.42	0.24	0.24

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
だいこん (葉部) 1986年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	21	0.07	0.07	0.01	0.01	<0.01	<0.01
				30	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			23	0.03	0.03	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				28	0.01	0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
だいこん (葉部) 1987年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	21	0.03	0.03	0.043	0.042		
				30	0.03	0.03	<0.005	<0.005		
	1			21	1.16	1.12	0.948	0.942		
				30	0.29	0.29	0.197	0.195		
だいこん (葉部) 2004年度	1	300~ 360 <sup>MC</sup> ×3	3	21	1.44	1.40	3.20	3.14		
はくさい (茎葉) 1983年度	1	400~ 800 <sup>EC</sup> ×3	3	7	0.08	0.08	0.12	0.12	<0.01	<0.01
				14	0.02	0.02	0.02	0.02	<0.01	<0.01
				22	0.01	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			7	0.15	0.14	0.18	0.18	0.01	0.01
				14	0.02	0.02	0.03	0.03	<0.01	<0.01
				21	0.07	0.07	0.04	0.04	<0.01	<0.01
はくさい (茎葉) 1983年度	1	600 <sup>MC</sup> ×3	3	7	1.56	1.48	2.32	2.32		
				14	1.22	1.20	1.19	1.16		
	1			7	2.02	2.02	2.04	2.00		
				14	1.80	1.79	0.67	0.66		
キャベツ (葉球) 1983年度	1	400~ 500 <sup>EC</sup> ×3	3	3	0.32	0.31	0.06	0.06	<0.01	<0.01
				7	0.16	0.15	0.04	0.04	<0.01	<0.01
				14	0.09	0.09	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			3	0.21	0.20	0.04	0.04	<0.01	<0.01
				7	0.06	0.06	0.02	0.02	<0.01	<0.01
				14	0.08	0.08	0.01	0.01	<0.01	<0.01
キャベツ (葉球) 1991年度	1	200 <sup>EC</sup> ×3	3	3			0.025	0.024		
				7			0.010	0.010		
				14			<0.004	<0.004		
	1			3			0.203	0.192		
				7			0.145	0.142		
				14			0.077	0.076		
キャベツ (葉球) 1991年度	1	400 <sup>EC</sup> ×3	3	3			0.021	0.019		
				7			0.008	0.008		
				14			<0.004	<0.004		
	1			3			0.399	0.394		
				7			0.324	0.320		
				14			0.122	0.113		
キャベツ (葉球) 2001年度	1	300~ 416 <sup>MC</sup> ×3	3	3	0.08	0.08	0.06	0.06		
				7	<0.02	<0.02	0.04	0.04		
				14	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02		
	1			3	0.20	0.20	0.14	0.12		
				7	0.26	0.26	0.03	0.03		
				14	0.03	0.02	<0.02	<0.02		

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
畑わさび (花及び花茎) 2005年度	1	450 <sup>G</sup> ×2	2	14	0.2	0.2				
				21	<0.1	<0.1				
	1			14	<0.1	<0.1				
				21	<0.1	<0.1				
畑わさび (葉(含葉柄)) 2005年度	1	450 <sup>G</sup> ×2	2	14	0.2	0.2				
				21	<0.1	<0.1				
	1			14	0.2	0.2				
				21	<0.1	<0.1				
畑わさび (根及び根茎) 2005年度	1	450 <sup>G</sup> ×2	2	14	<0.2	<0.2				
				21	<0.2	<0.2				
	1			14	0.5	0.5				
				21	<0.2	<0.2				
レタス (茎葉) 1991年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	14	0.79	0.75	0.110	0.108		
				14	0.05	0.05	0.048	0.047		
ふき (茎) 1992、1993年度	1	400 <sup>EC</sup> ×3	3	14	0.58	0.56	0.43	0.42		
				14	0.43	0.41	0.53	0.51		
ねぎ(葉ねぎ) (茎葉) 1989年度	1	300 <sup>EC</sup> ×2	2	21	0.31	0.30	0.151	0.150		
				21	1.04	1.00	0.779	0.766		
ねぎ(根深ねぎ) (茎葉) 1989、1991年度	1	300 <sup>EC</sup> ×2	2	21			0.449	0.437		
				21			0.186	0.179		
せり (茎葉) 2005、2006年度	1	300~ 600 <sup>EC</sup> ×2	2	35	0.3	0.3				
				35	0.2	0.2				
トマト (果実) 1991年度	1	500~ 600 <sup>EC</sup> ×2	2	1	0.42	0.42	0.556	0.555		
				3	0.61	0.60	0.625	0.609		
				7	0.62	0.60	0.438	0.432		
	1			1	0.25	0.25	0.238	0.233		
				3	0.25	0.24	0.299	0.264		
				7	0.23	0.23	0.195	0.190		
ピーマン (果実) 1991年度	1	400~ 600 <sup>EC</sup> ×3	3	1	1.68	1.64	1.75	1.71		
				3	1.64	1.58	1.54	1.47		
				7	0.90	0.87	0.980	0.922		
	1			1	2.72	2.62	2.73	2.66		
				3	2.45	2.40	2.35	2.28		
				7	1.73	1.72	1.75	1.68		
なす (果実) 1984年度	1	400 <sup>EC</sup> ×3	3	1	0.48	0.48	0.64	0.64	<0.01	<0.01
				3	0.42	0.41	0.46	0.46	<0.01	<0.01
				7	0.14	0.14	0.20	0.20	<0.01	<0.01
	1			1	0.17	0.16	0.14	0.14	<0.01	<0.01
				3	0.09	0.09	0.08	0.08	<0.01	<0.01
				7	0.02	0.02	0.01	0.01	<0.01	<0.01

作物名 (分析部位) 実施年度	試験圃 場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
なす (果実) 2000年度	1	366~ 600 <sup>MC</sup> ×3	3	1	0.23	0.23	0.262	0.258		
				3	0.11	0.11	0.209	0.208		
				7	0.01	0.01	0.024	0.024		
	1			1	0.08	0.08	0.06	0.06		
				3	<0.02	<0.02	0.04	0.04		
				7	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02		
きゅうり (果実) 1984年度	1	500 <sup>EC</sup> ×3	3	1	0.13	0.12	0.13	0.13	<0.01	<0.01
				3	0.04	0.04	0.06	0.06	<0.01	<0.01
				7	0.03	0.03	0.05	0.05	<0.01	<0.01
	1			1	0.13	0.13	0.18	0.18	<0.01	<0.01
				3	0.04	0.04	0.06	0.06	<0.01	<0.01
				7	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
きゅうり (果実) 2000年度	1	441~ 600 <sup>MC</sup> ×3	3	1	0.16	0.16	0.163	0.162		
				3	0.09	0.09	0.108	0.108		
				7	0.02	0.02	0.027	0.026		
	1			1	0.55	0.54	0.518	0.510		
				3	0.37	0.36	0.304	0.296		
				7	0.09	0.08	0.067	0.066		
すいか (果実) 1991年度	1	190~ 400 <sup>EC</sup>	3	3	<0.01	<0.01	0.004	0.004		
				7	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
				1	3	<0.01	<0.01	<0.004		
	7				<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
	7				<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
	メロン (果実) 1990年度			1	800 <sup>EC</sup> ×4	4	3	0.01		
7		0.02	0.02				0.039	0.039		
1		3	0.01				0.01	0.021	0.021	
		7	<0.01	<0.01			0.018	0.018		
		7	<0.01	<0.01			0.018	0.018		
にがうり (果実) 2004年度		1	200~ 404 <sup>EC</sup> ×3	3			3			0.30
	7				0.39	0.38				
	14				0.17	0.16				
	1	3			0.11	0.11				
		7			0.05	0.05				
		14			<0.01	<0.01				
オクラ (果実) 1996年度	1	400 <sup>EC</sup> ×3	3	1	1.12	1.10	0.979	0.936		
				3	0.55	0.54	0.388	0.367		
				7	0.05	0.05	0.018	0.016		
	1			1	0.16	0.16	0.120	0.113		
				3	0.06	0.06	0.090	0.086		
				7	0.03	0.03	0.037	0.036		
しょうが (根茎) 1993年度	1	300 <sup>EC</sup> ×3	3	7	<0.01	<0.01	0.008	0.008		
				14	<0.01	<0.01	0.004	0.004		
				1	7	0.02	0.02	0.054		
	14				<0.01	<0.01	0.004	0.004		
	14				<0.01	<0.01	0.004	0.004		
	しょうが (根茎) 1996年度			1	400 <sup>EC</sup>	1	7			
14		<0.005	<0.005							
1		7	0.007				0.007			
		7	0.006	0.006						
		14	0.006	0.006						

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
しょうが (根茎) 1996年度	1	200 <sup>EC</sup>	1	7	/	/	<0.005	<0.005	/	/
	14			<0.005			<0.005			
	1			7	/	/	<0.005	<0.005	/	/
	14			<0.005			<0.005			
葉しょうが (塊茎及び茎) 2004年度	1	400 <sup>EC</sup> ×3	3	7	/	/	0.34	0.34	/	/
	14			0.12			0.12			
				21			0.09	0.08		
	1			7			0.20	0.20		
				14			0.13	0.13		
				21			0.10	0.10		
さやえんどう (さや) 1989年度	1	300 <sup>EC</sup> ×2	2	1	0.35	0.34	0.41	0.40	/	/
				7	0.05	0.04	0.21	0.20		
				14	<0.02	<0.02	0.11	0.11		
				21	<0.02	<0.02	0.03	0.03		
	1		1	0.79	0.79	1.06	1.05			
			7	0.27	0.26	0.46	0.46			
			14	0.16	0.16	0.23	0.22			
			21	<0.02	<0.02	0.07	0.07			
さやいんげん (さや) 1990年度	1	300 <sup>EC</sup> ×2	2	7	0.84	0.82	0.874	0.860	/	/
				14	0.16	0.16	0.224	0.214		
				21	<0.01	<0.01	0.010	0.010		
	1		7	0.19	0.18	0.226	0.218			
			14	0.03	0.03	0.036	0.036			
			21	0.01	0.01	0.022	0.021			
えだまめ (さや) 1983、1984年度	1	300 <sup>EC</sup> ×2	2	21	0.27	0.26	0.33	0.33	/	/
	1			21	0.20	0.19	0.11	0.10		
えだまめ (さや) 1995年度	1	300 <sup>MC</sup> ×2	2	14	0.41	0.40	0.497	0.460	0.04	0.04
				21	0.48	0.48	0.743	0.720	0.04	0.04
				28	0.24	0.24	0.369	0.356	0.03	0.02
	1		14	0.66	0.66	1.18	1.15	0.04	0.04	
			21	0.32	0.31	0.651	0.607	0.03	0.03	
			28	0.12	0.12	0.206	0.188	0.03	0.02	
うど (軟化茎葉) 2003年度	1	600 <sup>EC</sup> ×2	2	195	/	/	<0.02	<0.02	/	/
	202			<0.02			<0.02			
				199			<0.02	<0.02		
	1			206			<0.02	<0.02		
エンサイ (茎葉) 2003、2004年度	1	250 <sup>EC</sup>	2	14	0.32	0.32	/	/	/	/
				21	<0.05	<0.05				
	1			14	0.65	0.64				
				21	0.10	0.10				

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
さといも葉柄 (葉柄) 2005年度	1	400 <sup>EC</sup> ×3	3	7	0.3	0.3	/	/	/	/
				14	0.1	0.1				
				21	<0.1	<0.1				
	1			7	0.3	0.2				
				14	0.2	0.2				
				21	<0.1	<0.1				
未成熟ささげ (さや) 2004年度	1	500 <sup>EC</sup> ×2	2	1	2.8	2.8	/	/	/	/
				3	1.8	1.8				
				7	0.6	0.6				
	1			1	1.9	1.9				
				3	1.0	1.0				
				7	0.1	0.1				
モロヘイヤ (茎葉) 2004年度	1	408~	1	14	/	/	0.65	0.65	/	/
	1	440 <sup>EC</sup>		14	/	/	0.16	0.16		
やまいも (むかご) (可食部) 2004年度	1	600 <sup>EC</sup> ×3	3	14	2.43	2.40	/	/	/	/
				21	1.42	1.37				
				30	0.40	0.40				
	1			14	1.58	1.58				
				21	0.75	0.75				
				30	0.21	0.20				
れんこん (根茎) 1993年度	1	600 <sup>G</sup> ×3	3	14	<0.01	<0.01	0.008	0.008	/	/
				21	<0.01	<0.01	0.005	0.004		
				28	—	—	<0.004	<0.004		
	1			14	<0.01	<0.01	0.010	0.010		
				21	<0.01	<0.01	0.004	0.004		
れんこん (根茎) 1993年度	1	200 <sup>DL</sup> ×3	3	14	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004	/	/
				21	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
				28	—	—	<0.004	<0.004		
	1			14	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
				21	<0.01	<0.01	<0.004	<0.004		
温州みかん (果肉) 1986年度	1	1,000~ 1,600 <sup>EC</sup> ×3	3	14	<0.01	<0.01	0.03	0.03	<0.01	<0.01
				20	<0.01	<0.01	0.02	0.02	<0.01	<0.01
				28	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
	1			14	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
				21	<0.01	<0.01	0.02	0.02	<0.01	<0.01
				28	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
温州みかん (果皮) 1986年度	1	1,000~ 1,600 <sup>EC</sup> ×3	3	14	7.18	6.90	6.47	6.46	0.53	0.52
				20	6.57	6.43	4.11	4.06	0.27	0.27
				28	5.24	5.04	3.16	3.14	0.27	0.27
	1			14	11.4	11.4	8.30	8.28	0.71	0.69
				21	9.64	9.35	7.28	7.13	0.52	0.52
				28	7.60	7.46	6.08	5.98	0.56	0.56

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
なつみかん (果肉) 1983年度	1	1,000~ 1,200 <sup>EC</sup> ×3	3	14	0.02	0.02	0.05	0.05	0.02	0.02
				21	0.01	0.01	0.03	0.02	0.01	0.01
				28	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			14	0.01	0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
				21	0.03	0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				28	0.01	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
なつみかん (果皮) 1983年度	1	1,000~ 1,200 <sup>EC</sup> ×3	3	14	4.17	4.06	2.97	2.93	0.88	0.87
				21	4.01	3.82	2.97	2.96	1.08	1.06
				28	4.21	4.04	3.15	3.08	1.11	1.08
	1			14	3.18	3.10	2.43	2.39	0.93	0.90
				21	3.28	3.11	2.05	2.02	0.82	0.81
				28	2.78	2.77	2.06	2.00	0.88	0.88
なつみかん (果実全体) 1983年度	1	1,000~ 1,200 <sup>EC</sup> ×3	3	14	/	1.03	/	/	/	/
				21	/	0.92	/	/	/	/
				28	/	1.05	/	/	/	/
	1			14	/	1.00	/	/	/	/
				21	/	1.01	/	/	/	/
				28	/	0.89	/	/	/	/
かぼす (果実) 2006年度	1	1,000 <sup>EC</sup> ×3	3	14	/	/	2.72	2.70	/	/
				21	/	/	1.98	1.92	/	/
				28	/	/	0.98	0.95	/	/
すだち (果実) 2006年度	1	1,280 <sup>EC</sup> ×3	3	14	/	/	1.00	0.98	/	/
				21	/	/	0.76	0.75	/	/
				28	/	/	0.84	0.80	/	/
りんご (果実) 1983年度	1	1,000~ 1,200 <sup>WP</sup> ×3	3	14	0.41	0.39	0.23	0.22	0.26	0.25
				21	0.28	0.28	0.16	0.16	0.22	0.21
				28	0.31	0.29	0.16	0.16	0.26	0.25
	1			14	0.82	0.80	0.55	0.54	0.21	0.21
				21	0.70	0.70	0.58	0.58	0.23	0.22
				28	0.59	0.56	0.32	0.32	0.15	0.15
なし (果実) 1983年度	1	800~ 1,000 <sup>WP</sup> ×3	3	14	0.23	0.23	0.72	0.72	0.20	0.20
				21	0.22	0.21	0.35	0.34	0.19	0.19
				27	0.22	0.22	0.32	0.32	0.17	0.17
	41			0.20	0.19	0.27	0.26	0.14	0.13	
	1			14	0.53	0.52	0.63	0.62	0.14	0.14
				21	0.49	0.46	0.50	0.50	0.09	0.09
28		0.30	0.30	0.34	0.34	0.08	0.08			
もも (果実) 1984年度	1	800 <sup>WP</sup> ×3	3	14	<0.01	<0.01	0.02	0.02	0.01	0.01
				21	<0.01	<0.01	0.01	0.01	0.02	0.02
				28	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.02	0.02
	1			14	<0.01	<0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
				21	0.03	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01
				28	0.02	0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01

作物名 (分析部位) 実施年度	試験圃 場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)				(参考)	
					エトフェンプロックス				代謝物IV	
					公的分析機関		社内分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
かき (果実) 1984年度	1	1,000WP ×3	3	42	0.45	0.44	0.55	0.54	0.07	0.07
	1			42	0.57	0.57	0.62	0.62	0.10	0.10
茶 (荒茶) 1983年度	1	400EC ×2	2	21	1.49	1.49	1.68	1.62	0.12	0.12
	1			21	3.84	3.62	3.98	3.98	0.16	0.16
茶 (浸出液) 1983年度	1	400EC ×2	2	21	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02		
	1			21	0.02	0.02	0.02	0.02		
水稲 (青刈り) 1994年度	1	97.5~ 100MC	1	1			2.68	2.59		
				2			1.55	1.47		
				8			0.91	0.85		
				15			0.56	0.55		
	1	100MC	1	1			2.57	2.39		
				6			0.97	0.95		
				13			0.17	0.16		
				2			1.78	1.66		
1	100MC	1	8			0.66	0.60			
			15			0.84	0.76			
			1			4.47	4.04			
			6			2.73	2.60			
水稲 (青刈り) 1998年度	1	100MC	1	13			0.82	0.80		
				1			2.02	1.98		
				8			0.89	0.84		
	1	100MC	1	15			0.10	0.09		
				1			2.16	2.04		
				6			1.26	1.22		
	1	100MC	1	14			0.30	0.28		
				21			0.25	0.24		
				1			0.97	0.91		
	1	100MC	1	8			0.32	0.31		
				15			0.30	0.30		
				1			3.14	3.12		
1	100EC	1	6			1.02	0.99			
			14			0.43	0.42			
			21			0.22	0.22			
1	100EC	1	1			1.57	1.56			
			6			0.89	0.88			
			14			0.44	0.44			
1	100EC	1	21			0.24	0.23			

- 1 注) ・試験には WP : 水和剤、G : 粒剤、EC : 乳剤、DL : 粉剤 DL、OS : 油剤、  
 2 MC : マイクロカプセル剤、SC : フロアブル を用いた  
 3 ・すべてのデータが定量限界未満の場合は定量限界値の平均に<を付して記載した  
 4 ・代謝物IVの残留値はエトフェンプロックスに換算して記載した。  
 5 換算係数は、エトフェンプロックス/代謝物IV=0.964  
 6

- 1 <参照>  
2 1 食品安全委員会に対し意見を求められた案件 / 清涼飲料水：  
3 (URL : <http://www.fsc.go.jp/hyouka/hy/hy-uke-bunsyo-20.pdf>)  
4 2 7 月 1 日付けで厚生労働大臣から食品安全委員会委員長へ食品健康影響評価を依  
5 頼した事項：第 3 回食品安全委員会資料  
6 (URL : <http://www.fsc.go.jp/iinkai/i-dai3/dai3kai-kouseisyousiryoku.pdf>)  
7 3 7 月 1 日に厚生労働省より意見の聴取要請のあった、清涼飲料水の規格基準の改  
8 正について：第 1 回食品安全委員会農薬専門調査会資料 6  
9 (URL : <http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/n-dai1/nou1-siryoku6.pdf>)  
10 4 第 1 回食品安全委員会農薬専門調査会  
11 (URL : <http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/n-dai1/index.html>)  
12 5 第 6 回食品安全委員会農薬専門調査会  
13 (URL : <http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/n-dai6/index.html>)  
14 6 第 22 回食品安全委員会農薬専門調査会  
15 (URL : <http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/n-dai22/index.html>)  
16 7 食品、添加物等の規格基準（昭和 34 年厚生省告示第 370 号）の一部を改正する  
17 件（平成 17 年 11 月 29 日付、厚生労働省告示第 499 号）  
18 8 農薬抄録「エトフェンプロックス」（殺虫剤）（平成 21 年 1 月 26 日改訂）：三  
19 井化学株式会社、一部公表予定  
20 9 JMPR : Etofenprox ( Pesticide residues in food : evaluation Part II  
21 Toxicology) (1993)  
22 10 食品健康影響評価について  
23 (URL : <http://www.fsc.go.jp/hyouka/hy/hy-uke-etofenprox-210217.pdf>)  
24 11 エトフェンプロックスの魚介類における最大推定残留値に係る資料  
25 12 第 274 回食品安全委員会  
26 (URL : <http://www.fsc.go.jp/iinkai/i-dai274/index.html>)  
27 13 第 21 回食品安全委員会農薬専門調査会確認評価第二部会  
28 (URL : [http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kakunin2\\_dai21/index.html](http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kakunin2_dai21/index.html))  
29 14 第 53 回食品安全委員会農薬専門調査会幹事会  
30 (URL : [http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kanjikai\\_dai53/index.html](http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kanjikai_dai53/index.html))  
31